

赤軍

再刊準備2号

過渡期社会論

共産主義者同盟赤軍派(プロ革)

過
渡
期
社
會
論

過渡期社会論
目次

中国継続革命—根拠地化の闘いと固く結合したインドシナ革命戦争
の大勝利は反帝反社帝・世界革命戦争の一大前進である……………

過渡期社会論・基礎

毛沢東思想・中国革命を、プロレタリア革命派の立場から正しく

評価・撰取するために……………

酒井隆樹……………

はしめに……………

第一節 毛沢東・中国革命の歴史的世界的位置

第二節 社会主義社会の一国的建設は不可能なのか——一国社会主義は必ず社会帝国

主義に変質・墮落するののか？

第三節 社会主義社会に「階級闘争」は存在しないのか——「階級闘争」が存在する

社会は社会主義社会ではないのか？

第四節 スタ・トロ論争批判——共産主義論・過渡期社会論を通して

過渡期社会論

社会主義論と毛沢東思想……………

一向……………

健……………

第一章 社会主義の下での階級闘争存続論、プロレタリア階級独裁の継続革命路線を

擁護する(上)

第二章 全人民所有制の下で階級闘争は存続するか——中国継続革命路線を擁護する

ために(下)

第三章 毛沢東思想はマルクス・レーニン主義の過渡期世界における継承・発展であ

る。これをスターリン主義と同一視して批判・否定する手口を断固批判する

第四章 さらぎ派のエセ社会主義論を批判する

現代過渡期世界の新展開——中国継続革命——根拠地化の
闘いと固く結合したインドシナ革命戦争の大勝利は、
反帝反社帝世界革命戦争の一大前進である。

△一▽ インドシナ革命の勝利はインドシナ人民自身の勝利であると同時に、インドシナ—中国人民の、国際的人民の共同の勝利であり、帝国主義・社会帝国主義、トロツキズムの共同の敗北を意味する。

インドシナ革命戦争の勝利の世界史的意義を現時点で直ちに全面的に明らかにすることは困難であるが、今、確認し得る点を明らかにすることは必要である。我々は、以下、この意義を三点にわたって述べることにする。

第一は、この革命戦争勝利の直接の推進力は、ベトナム人民・カンボジア人民の刻苦奮闘にあることは異論のないことである。第二に、しかし、この勝利を中国革命の勝利と切離して論じることが出来ないし、国際プロレタリア・被抑圧人民・民族の勝利といわないまでも、正確には、インドシナ—中国人民の共同の勝利としてとらえるべきであること。また、第三に、その別の側面としての米帝等国際帝国主義とソ連社会帝国主義と、そして若干敗北の性質は違いが反スタ・トロツキズムの敗北としてとらえるべきであること。

インドシナ三国人民は、仏帝国主義に植民地化されて以来、民族民主主義革命を闘い続け、戦後は米帝国主義の新植民主義の侵略・抑圧・反革命にさらされ、これに対して、ディエンペンフー以来でも二十年間の戦闘をうまずたゆまず継続してきた。米帝国主義とソ連社会帝国主義は、第二次大戦後

昂揚した民族解放闘争の高波を圧殺し、国際反革命軍勢力を駆使して、新(旧)植民地体制を構築し、第三世界人民を搾取・収奪し抜き、この犠牲の基底の上に、国際帝国主義の世界体制を築きあげ、戦後三十年間の危機のたびごとに、第三世界にその矛盾を転嫁して危機を乗りきり、延命してきた。

この帝国主義の存立の基底で犠牲にし尽された第三世界人民の前線代表としてインドシナ人民は闘い続け、他方、国際帝国主義・社会帝国主義はインドシナでの敗北は、新植民地体制の国際帝国主義の全般的崩壊につらなるが故に、国際帝国主義は全重量をかけてこれを反革命し、社会帝国主義もまた、マルクス主義の仮面をかぶって、この勝利を疎外することに全力をあげた。これに対して、第三世界の一員として、第二次帝国主義戦争の過程で新民主主義革命を闘い続けた中国は、インドシナ三国人民の大後方として、またその指導部として、帝国主義と社会帝国主義と直接対峙しつつ、国際プロレタリアート・被抑圧人民・民族の代表部、偉大な後方として、世界革命戦争の根拠地として、中国は自らを存在し続けさせたのである。

一九七一年と七二年のあのインドシナ革命における米帝とカイライ共の瓦解が進み、革命の勝利が目前に迫ったかの如く見えた段階で、革命の勝利とその世界的波及を自らの存立体制の崩壊として恐れたソ連社会帝国主義の反革命「和平」攻撃が米帝と結託して推進される中で、インドシナ—中国人

民が革命の最後の勝利を掌中にするには、国際帝国主義打倒のみならず、ソ連社会帝国主義の打倒を具体的射程において闘わなければ最後の勝利が確保できないことが判明し、インドシナ革命戦争は、新たに現代過渡期世界の根底的変革、反帝反社帝・世界革命の最前線を担うことを要請された。とりわけ、帝国主義・社会帝国主義と世界的規模で直接対峙し、この二つの敵の同時打倒を直接的に要求されている、中国においては、対外的な反ソ連社会帝国主義、対内的な劉少奇等走資実権派打倒の社会主義建設・社会主義革命の継続革命の闘いとしてあったプロレタリア文化大革命を今一段と発展させた。反帝反社帝の国際・国内戦略を打ち固めて、戦争と革命の時代「革命が戦争をおしとどめるか、戦争が革命をひき起すか」の情勢に一步もひるまず対決してゆくことを鋭く問われた情勢において中国は、米ソの分断と中間勢力の引きつけをめざした人民外交方針や資本主義復活を企み、資本主義と保守反動支配階級のイデオロギーたる孔孟の思想の徒たる林彪を批判し、合わせて防修・反修・反社帝をめざした批林批孔運動や十全大会のプロレタリア独裁闘争を組織し、八億人民をガッチリと反帝反社帝世界革命戦略のもとに団結させ、そのことよってインドシナ三国人民の大後方としての偉大な役割りを果たしたばかりか、全世界プロレタリア・被抑圧人民・民族の指導部・根拠地としての偉大な役割りを果たしたのである。正にこの、反帝反社帝国際国内世界革命戦略・根拠

地化—継続革命の路線の圧倒的な正しさと成功ゆえに米帝とソ社帝による反革命「和平」策動は水泡に帰し、逆にインドシナ—中国人民が主動的に和平劇を利用し、帝国主義と社会帝国主義の側に内部分裂を惹起せしめたのである。ニクソン(フォード)・キッシンジャー戦略は破綻し、ニクソンはウォーターゲートに溺死したし、ソ社帝もつけいることはできず、かえってその帝国主義たる本性を露わにせざるをえなくなり、両者ともインドシナに口をさしはさむことができないうような新たな国際階級関係が生じた。かかる国際階級関係の形成の中でインドシナ三国人民はその力を大いに発揮し「道にかなえば助けは多く、道にそむけば助けは少い。弱国は強国を打ち負かすことができ、小国は大国を打ち負かすことができる。小国の人民が敢然と闘争にたちあがり、敢然と武器をとり自国の運命を握りさえすれば必ず大国の侵略にうちかつことができる。」(毛沢東)という真理を見事に実証し、孤立したかいらい共に思う存分料理することができたのである。従って、インドシナ革命戦争の勝利は、インドシナ人民—中国人民の、あるいは、これを取りまく世界プロレタリア人民の共同の反帝国主義・反社会帝国主義の持久的な世界革命戦争の勝利であるといえる。

だから、帝国主義者や社会帝国主義者が自らの敗北を隠蔽し、勝利を一国レベルにとどめ、よくいってもせいぜい「ブルジョア民主主義の民族独立運動の歴史的普遍性」のレベル

で評価したり、いわんや中国革命と切り離すばかりか、中国革命とインドシナ革命を敵対的關係としてとらえる見解を断固批判しなければならぬ。また、國際情勢がこのようにすばらしく展開し始めるや否や、これまで「小児病的」に「和平反対」「中国の裏切り」をいい続け、反中国にうつつを抜かしていた、日共や反スター主義者が、またぞろ「インドシナ連帯」の旗をかかげて乗り出してきている事態を批判し、彼らに現在の世界階級關係とそでの反帝反社帝世界革命戰爭戰略の意義を明らかにしておかなければならない。反スタ・トロツキズムはインドシナ革命の勝利に驚き、一斉に反中国キャンペーンをくり広げ、第四インターは「トロツキスト政治犯が拘禁されている。」とデマ宣伝をやり始め、インドシナ革命と中国革命を、一方では切り離し、敵対させ、他方では中国を「中ソ・スターリン主義」として取り扱い、「スターリン主義」による革命の「一国社会主義的固定化、反動化と闘う」と的はずれな人言壮語をもてあそぶのである。又、「第三世界の闘う人民と結合してスターリン主義の裏切りを暴露していく」といった赤色排外主義を臆面もなく叫びたてる。社青同解放派は國際路線など一片も持っていないくせに「國際帝国主義は中国を通じて革命を圧殺していく」とかの当てすっぽうをふれまわっている。これらトロツキズムは國際階級關係や反帝反社帝・正而世界革命の持久戰略とその実体を全く知らず、情勢を具体的に分析する能力をもたず、中國とソ連を一緒くたにしてスターリン主義として扱い、中国を誹謗中傷することなどを特徴として煽情的に世界革命を呼号するのみで、實際はインドシナ・中国革命の成功を喜ばず、これに敵対してきている。

ていること、最近では、インドシナ革命の大詰めのみかでの「和平」策動等として、戦後國際共産主義運動史の中でも今や鮮明になっている。

現代過渡期世界は、「益々帝国主義が全面的に崩壊に向かい、社会主義が全面的に勝利に向かう時代である」ととりわけ、七〇年代以降の二十世紀後半は、帝と帝、帝と社帝、帝・社帝と社会主義、帝・社帝と被抑圧民族、資本と賃労働等の五つの基本矛盾が帝国主義と社会帝国主義の危機の中で激化しはじめる現代である。かかる帝国主義世界体制の危機をくいじめ、その中で帝国主義的利益を獲得するために、益々ソ連は社会帝国主義國化し、反革命の所業を繰り返し、國際プロレタリア人民とその指導部中国に反革命戰爭をしかける条件を成熟させている。又帝国主義と社会帝国主義の戰爭の条件も成熟している。従って現代は、帝国主義と社会帝国主義の複合支配に抗し、國際プロレタリア人民と中国が世界革命戰爭を組織しつう対決している三極分立で構成され、革命と戰爭の關係が「革命（戰爭）が（帝国主義強盜）戰爭をおしとどめるか、（強盜）戰爭が革命（戰爭）をひきおこすか」の關係としてその条件が成熟する革命と戰爭の時代であるといえる。

ところが、かかる情勢の中で、ソ連社会帝国主義に対しては、プロレタリア人民はこれを社会帝国主義として思想的・政治的・理論的に批判しきれず、これに幻想をもったりダマ

そして日本人民に左から排外主義を吹き込む役割りを担っているのである。トロツキズムにとっては、毛沢東思想・中国共産党の正しさが証明されることは自らの政治的死につながる故に必死で中国革命に敵対しているのである。しかし、これに對する毛派も、國際階級關係とここに占める反帝反社帝持久戰略の意義を捉えきれず、帝国主義・社会帝国主義・トロツキズムの反動的宣伝を打破りきれないでいる。かかる情勢の中に、今や、日本革命派はベトナム「和平」をめぐる決定的に分解し始めている。日中革命派の動向に對して、小ブル平和主義、左翼空論主義、コスモポリタニズム、反スタ一国主義を一掃し、眞のプロレタリア國際主義たる毛沢東思想を支持した反帝反社帝世界革命戰略の路線をうまずたゆまず、プロレタリア・人民の中に浸透させてゆかなければならない。

△二▽ インドシナ革命戰爭勝利の源動力は反帝反社帝世界革命戰略にある。それでは、反帝反社帝世界革命戰略とは何か。

第一、ソ連が社会主義の仮面をかぶった帝国主義であり、革命と反革命が煮つまった段階では味方の格好をして現われる最も強力な反革命であることが、アルジェリア革命の挫折・変質、キューバ革命の挫折・大幅後退、そしてパレスチナ革命や第三世界の民族解放・社会主義革命が発展しようとするれば、常にこの運動の反革命的解体をめざして立ちあらわれ

サレたりして——勿論背景にはソ連の帝国主義政治の物質力があるのだが——そのブルジョア的・反革命的本質を見破りかれてないが故に、かかる革命と戰爭の時代の如き、諸階級の主体的力量が階級闘争の方向を決定的に左右する段階では、ソ連社会帝国主義の反革命の所業は致命的な役割を果すことになる。それ故、國際プロレタリア人民は、プロレタリア共産主義革命を最後まで徹底して遂行するためには、この正体を徹底して暴露し、これから自らを区別すると同時に、プロレタリア人民へのこの影響力を断ちきり、「社会主義の仮面をかぶった帝国主義」として、その経済的、社会的、思想的本質を衝き出し、帝国主義打倒と同じ比重・地位をもって、社会帝国主義打倒を公然と提示し、そのことによって、帝国主義と社会帝国主義の複合支配のくびきからプロレタリア・人民を解放することによって、その階級的エネルギーを解き放つ必要があること。つまり、反帝反社帝戰略は、ソ連社会帝国主義を帝国主義と明瞭に規定し、そのことによって現代過渡期世界の諸段階の相互關係と危機の構造を明瞭に照らし出し、敵と味方を明瞭にした革命戰略である。

第二は以下である。このソ連の社会帝国主義が本格化したのは、一九二〇年代から三〇年代初頭の、世界革命の波の中でスターリン・コミンテルンが工業・資本主義國の前段階階級戦のプロレタリア独裁社会主義革命に敗北し、かつ、農業・植民地國の、プロレタリアの指導権のもとでの——マルクス

主義のプロレタリア前衛党の指導のもとでの——民族民主主義革命が敗北し、国内的には、農業集団化に着手したものの国家所有と集団所有の併存する社会にも拘わらず、この社会では階級・階級斗争は存在しないと、階級斗争消滅論を展開し、国際的・国内的な労働者・貧農に依拠した継続革命の路線を放棄し、国際的・国内的ブルジョア階級勢力に依拠し一國社会主義ならぬ一國国家独占資本主義の道を打ち固め、世界・自國革命を公然と裏切り始めたことと軌を一にしている。勿論、それまでのスターリンの指導が——トロツキーの路線が正しいわけではなかったが——正しかったわけではないにせよ、一九二〇年代まではロシア革命とレーニン主義の遺産が存在し、三〇年代の革命の敗北を経験してなかった時点でスターリン主義が全面開花してなかったこと、それ故に二〇年代のロシア社会を我々は国家資本主義、或いは小ブル社会主義化とは規定しても、社会帝国主義とは規定しない。そしてこのスターリンの社会帝国主義の道は、スターリン死後、フルシチョフ—ブレジネフによって、「平和共存」——「平和移行」——「全人民の国家」——「全人民の社会」等の社会帝国主義の路線として体系化され、完成されていった。このように、反帝反社帝戦略はレーニン死後の国際共産主義運動の総括、スターリン主義批判に歴史的基礎を置いて形成された戦略である。

第三に、我々の反社帝論は政治経済学を主体とする弁証法

争を継続しない限り、自國と世界のブルジョア階級によって内部からその指導権を奪取され、資本主義に逆行してしまうこと、このことによって社会主義の仮面をかぶった帝国主義が誕生し、ブルジョアはプロレタリアート内部に反革命の基地をもつことによって、世界と各國の革命を流産させてしまうこと、これ等の観点を基本観点としているものである。現にソ連は、「階級闘争消滅」「全人民の国家」「全人民の党」「利潤・賃金・価格の継続、労働の質による分配」「平和共存」「議會を通じた権力の平和移行」「民族ブルジョアジーを主体とする平和的民族解放」「社会主義大家族論」「社会主義国際分業論」やコンミュニオン四原則の否定、少数民族の圧迫、ラーゲリ政治、砲艦外交等腐臭ただよう帝国主義の反革命路線の下におびただしい商品売りさばいている。(この詳しい政治経済学上の理論的展開は塩見孝也論著や「再び、社会主義の下での階級闘争存続を擁護する」等のパンフを参照して欲しい。)つまり、反帝反社帝戦略はマルクス主義と、権力奪取した社会での共産主義建設と共産主義革命の共産主義継続革命戦略に基礎づけられているものである。

第四に、これ等の反帝反社帝戦略の基本骨格の大半は、毛沢東主席を先頭とする中国共産党の一九三〇年代以来のスターリン・コミンテルンとの自力更生的闘争の中で、とりわけ戦後の中ソ論争—プロ文化革命—批林批孔闘争等の中で樹立されたものであり、そのうちの幾分かは、戦後日本共産主義

的唯物論、史的唯物論に立脚し、又共産主義継続革命の路線の観点から科学的に規定されたものであり、トロツキーの如く、一國からの社会主義建設そのものを否定したり、或いは対馬思想とかトニークリフとかの反スタマルクス主義の如く非実践的なマルクス主義理論を教条的にあてはめてソ連を批判し、結局はこのことを通じて左から帝国主義に屈服する小ブル反スタ主義者のソ連論とは根本的に異なっているが、いずれにしても一度権力を奪取したり或いはその発展として資本主義生産関係が所有面で取り除かれたら、階級・階級闘争は自動的に消滅し、社会主義・共産主義が自然成長的に発展してゆくといつた生産力主義、経済決定論のブルジョア思想や、或いは一度権力奪取した党は永遠にプロレタリア人民の利益を防衛するとかいった神話をとことん粉砕するものである。つまり、生産手段を国有化しても、社会関係・分配関係や諸上部構造の革命が継続し、「ブルジョア階級が存在することも出来ない」革命が継続し、「ブルジョア階級が存在することも出来ない」ような世界共産主義の段階に到達しないあいだは、新旧のブルジョアジーが発生し、党の路線を修正主義にかえ、労働者農民を再び奴隷化して生産手段の管理者が資本家となること、従って資本主義から社会主義へ、又社会主義から共産主義への二つの過程全体を通じて、プロレタリア前衛党は、自國と世界のプロレタリア階級に依拠してブルジョア階級を消滅させ、この闘いを通じて階級を消滅させる、資本主義の道と共産主義の道の斗

運動における、共産主義者同盟を中心とする新左翼運動の経験の中で勝ちとられた戦略であること。従って、この戦略は、毛沢東思想——中国革命を支持することを公然と掲げること。第五は、この反帝反社帝戦略は革共同や四トロ等トロツキストの「反帝反スタ戦略」とは根本的に異なるものである。第四インターのトロツキー教条主義は、何故トロツキーがスターリンに敗北し、一九二〇年代以降の革命に肉薄できなかったのかを総括していない点を確認することで充分である。革マルは反スタマルクス主義——トロツキー主義によって、マルクス・レーニン主義を否定し、社会帝国主義に転落している点で我々との区別は明瞭である。中核派は反スタ派の中で唯一実践的で、革命派の地位を占めている潮流である。しかし彼等の「反帝反スタ」戦略も又小ブル社会主義の反スタマルクス主義——トロツキズムに立脚し、毛沢東思想をスターリン主義と規定し、毛沢東思想と中国革命の偉大な意義を認めず、これに敵対し、民族解放・社会主義の二段階戦略を認めず、国際・国内プロレタリア人民に依拠した継続革命を内実として、一國からの社会主義建設を否定し、つまり継続革命の路線を理解せず、反スタマルクス主義のソ連論、共産主義論を固持している点で(それ故に世界把握が、諸階級の有機的相互関係がわからず、観念的・主観的にならざるを得ず)左翼空論主義となるのである。

第七に、毛教条派の如くスターリン主義を美化し、ソ連社

会の変容をスターリン死後とみる、エセ反帝反社帝戦略とは異なること。——毛沢東は公式には、スターリンをフルシチョフ修正主義清算主義の批判の關係で、主要側面としては擁護する立場をとっているが、毛沢東思想の成長過程そのものが、反スターリンの過程であり、実質的には否定しているといふことは捉える。

第八、反帝・反社帝世界革命戦略は、過渡期世界にあつて、資本主義国に於ける帝國主義打倒とプロレタリア革命の実現、他方での労働者国家に於ける資本家階級の最終的消滅・二つの道の階級闘争を通じて共産主義を樹立して、全世界プロレタリア人民が同時に世界プロレタリア独裁・世界社会主義を実現してゆくという二つの敵、二つの任務をもった革命を一つの革命として統一する革命戦略であり、更に、プロレタリア革命に於ける客主の弁証法的關係を端的に表現し、共産主義革命における思想路線の重要性を鮮明にした戦略である。更に、この革命戦略は、資本主義国、発展途上国、労働者国家の三ブロックの革命に共通する戦略であり、世界革命の戦略であると同時に、各国革命の戦略であり、国際路線であると同時に国内路線である。一言でいえば、資本主義から共産主義にいたる、過渡期世界全体に普遍的な、プロレタリア革命の戦略である。この革命戦略を全世界のプロレタリア人民が自からの手に握りしめることによって、その自発性・創造性・能動的攻撃性を尽きることなく發揮し得るのであり、

矛盾の一切をこの第三世界人民に犠牲的に転嫁してきたこと。このことからして、帝國主義と社会帝國主義は全ゆる帝國主義政治を駆使して、この新植民地体制を全体重をかけて死守しようとしたが、この反革命・侵略・抑圧策動の根幹が打破された以上、第三世界の民族解放・社会主義革命の奔流は、何者にもおしとどめることができず、第三世界に爆発し、無数の第二、第三のベトナムの大火柱が世界各国に吹きあがつてゆくであろう。パレスチナ、PFLPのハバシュ議長は「インドシナ革命の勝利は我々の勇気を鼓舞してくれ、これ得益々自信がついた」と声明している。この革命はタイ、マレーシア、シンガポール、インドネシアに南下し、ビルマ、インド、パングラデシュ、パキスタン、パレスチナ・アラブ革命へと西進し、アフリカ革命に伝播し、アジア——インド大陸——中近東——アフリカ大陸を一続きの民族解放・社会主義のベルトへと構成してゆくだろう。又フィリピン、台湾、朝鮮、日本へと北進してゆくことは必然である。更に太平洋を越え、中南米大陸の民族解放・社会主義革命の火に油をそそぐことになるであろう。先進資本主義国日本は、北米大陸とソ連社帝へ革命が波及する結節点であり、極東からアジア全域に於ける革命と反革命の焦点として、好むと好まざるにかかわらず登場せざるを得ない。アジア革命が日本帝國主義の生命線を握っていることは、マラッカ海峡一つでもアジア革命軍が管理することになるような事態を想定すること

共産主義者本来の攻撃的階級闘争戦略をマルクス主義の観点、党の観点から再構成、止揚した戦略である。

△三▽ インドシナ革命戦争は世界革命戦争の対峙段階の均衡を打破り、世界党の条件をつくり出す。

それでは、インドシナ革命の勝利は、如何なる事態を引き起すだろうか。その第一は、この三国革命の勝利によって、アジア大陸の大半部に社会主義ベルトが誕生し、しかもこの革命は、自らの民族解放革命戦争の体験を源動力にし、ソ連社会帝國主義を反面教師とし、中国革命を正面教師とした、マルクス・レーニン主義にしっかり導かれた革命であることに於て、根拠地化し継続革命の路線を踏襲していることは至明のことである。この赤い太陽から放射する真赤な灼熱は、近隣諸国はおろか全世界にさし込んでゆき、全世界プロレタリア人民の行方をあかあかと照らし出し、最早帝國主義や社会帝國主義もうかつには手がつけれられないような、世界的階級關係の変化が生れるであろう。このような、世界階級闘争の地殻変動は、ベトナム・インドシナ革命が、過渡期世界の世界革命戦争の対峙段階の均衡を打破った革命として、ロシア革命、中国革命に引き継いだ世界的地位をもった革命であることを明瞭にしてゆくことであろう。新植民地体制・第三世界が帝國主義の不可欠の存立条件であり、帝國主義の

鮮明になる。日本に限らず全ての國際帝國主義は、自らの存立条件を新旧植民地体制においている以上、この不可欠の存立条件が消滅してゆけば、國際帝國主義は益々危機に立たされるが故に、この民族解放・社会主義革命の進攻に対して、かなわぬまでも、絶望的反革命・侵略・抑圧をより一層露骨に推進し、他方では、国内プロレタリア人民の反革命・抑圧・搾取・収奪を一層強めてゆく。それ故に、民族解放・社会主義革命をプロレタリア革命と根拠地——継続革命と益々強く結合して、文字通り単一の革命と反革命の世界戦線を形成してゆくこと、このような世界革命戦争の発展の中で、帝國主義、社会帝國主義は根底的・構造的危機を一層深化させ、革命と戦争の時代は先進資本主義国にも一層その特質を刻印し、民族解放・社会主義と根拠地化・継続革命と結合してゆくだろう。このプロレタリア社会主義革命は、プロレタリア階級と全人類に、未だかつてみたくともない共産主義革命の課題と試練とを与えつつ、豊かに成長し、プロレタリア人民に共産主義の資質を培わせてゆくことであろう。このような三ブロック革命の展開とその結合は、世界革命戦争の大進攻を可能とする、反帝・反社帝の世界革命戦略で武装された革命主体を、各国各ブロックに世界党として誕生させ、毛沢東思想を支持し、社会帝國主義を批判し、反スターロツキズムと毛教条主義を超克する潮流が世界的に誕生してゆく

ことであろう。

△四▽ インドシナ革命戦争の勝利に応え、極東階級情勢の激動をプロレタリア革命に転化し抜くプロレタリア単一党の創建を！

このインドシナ革命の勝利、中国継続革命の大前進、朝鮮南部、台湾、日本に於ける階級闘争の激化と、朝鮮労働党の闘いは、アジア革命の大奔流を極東アジアにおしたて、極東反革命体制にもつごい重圧をかけること、この大奔流によって極東反共防波堤はつき崩され、極東革命が胎動し始めているが故に、朴は八人の民主的人士を「人民革命党员」とデッチあげ、死刑にし、金芝河氏を再逮捕し朝鮮北部への挑発を強め、三・一九「国家冒瀆罪」のデッチ上げ、「安保阻害行為防止法」で数万人を予防検束しようとする「社会保安に関する法律」の立法化策動、学生革命を予防反革命する学生の強制的防衛隊化、等の朝鮮人民への大攻撃をしかけてきている。台湾では、中国人民の売国奴蔣介石がインドシナ革命の勝利の只中で絶望して死んでゆき、今や台湾政権を承認する諸国は数える位しなくなりつつある。日帝はかかる危機的事態に対して、天皇政治を前面に押し出して、「韓」台を自己の反革命前線として死守すべく、「韓国条項」の有効性を強調し、日米安保の再編強化と国内なし崩しファシズムの

安定期での日共の社会帝国主義化に抗して発生した種々の小ブル革命派が、民族解放・社会主義と根柢地化し継続革命の革命闘争と結合し、毛沢東思想を支持した、反帝・反社帝のプロレタリア独裁・社会主義革命の路線をもって、国際・国内プロレタリア人民の要求を体現し抜くプロレタリア単一党を緊要の課題として要求されている時はない。革共同の反帝反スターリン主義運動は、反帝反スターリン戦略そのものが閉ざされた体系であり、「一國社会主義建設反対論」や「プロレタリアの指導のもとでの二段階戦略反対」故に民族解放・社会主義と中国革命に敵対し、国内的には、その反スタマルクス主義・反スタトロツキズムの小ブル日和見主義の故に七〇年代革命勢力の下層プロレタリア等に立脚できず、階級敵と闘おうとしない。革マルは反毛、反スタ、反マルクス・レーニン主義を徹底して社会帝国主義に転落しようとしている。ブント系革命派は、これら革共同主義を克服せんとし、過渡期世界論に立脚して武装闘争を闘い、反スタマルクス主義・反スタトロツキズムの克服に着手したが、マルクス・レーニン主義に正しく立脚し、正しく毛沢東思想を支持し切れず、分散化してしまった。他方、相対的安定期のもう一つの翼たる毛沢東教条主義は、真にマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を、日本階級闘争に創造的に適用し切れず、人民民主主義の民族民主主義革命路線をとることによって、経済主義、議会主義の域を出ようとしない。総じて、相対的安定期の反

強化でもって対抗しようとしている。日帝はこの権力再編を要に、皇太子訪沖海洋博による沖繩労働人民抑圧、搾取、収奪、侵略反革命前線基地化を据えようとしている。これに對して、金日成朝鮮労働党主席は四月一八日訪中し中国共産党と会談して「第二次大戦後、東方では偉大な革命的変革が起こり、アジアの姿は根本的に変化し、かつての植民地アジア、立ちおくれた東方は永遠に過ぎ去り、独立、進歩繁栄に向かう新しいアジアが現われた。」しかし、歴史は米帝国主義者とその手先によって左右されるものではなくて、歴史を創造する人民の願望と行動の方向に向って、確固として前進している。もしも、南朝鮮支配者集団がなおも銃剣で南朝鮮の社会の下層に長い間蓄積されてきた人民の不満や憎しみを弾圧し続けるならば、必ずより大きな革命の爆発を引き起すだろう。いったん南朝鮮に革命が起これば、我々は同一民族としてけっして手をこまねいて傍観することなく、積極的に南朝鮮人民を支援するであろう。この戦争で我々が失うものは軍事境界線であり、手にいれるものは祖国である」とその決意を表明した。日本プロレタリア人民はかかる極東アジア情勢の中で、日米帝国主義と社会帝国主義の侵略・抑圧・反革命・排外主義・差別と分断・搾取と収奪・生活破壊にさらされ、激しく決起し始めている。しかし、これ等人民の決起を革命の勝利に導くプロレタリア革命党が創建されてないことが、日本階級闘争の決定的弱点になっている。今ほど相対的

スタトロツキズムと毛教条主義が役にたたなくなり、又この両者を止揚せんとしたブントも、マルクス・レーニン主義とプロレタリア階級に立脚し、又毛沢東思想支持を鮮明にする方向で過渡期世界論を発展し切れず、ないしはこれを清算したが故に、中間主義・折衷主義的性格が濃厚でイデオロギー的牽引力をうしなってしまったこと。しかし、現代過渡期世界の革命と戦争の時代の成熟、この情勢の中の毛沢東思想とその反帝・反社帝世界革命戦略の真価の發揮と、他方、相対的安定期の小ブル革命派を試練にかけた安保大会戦の総敗北とその反省を通じた成長の動きが形成され、それはさしあたっての思想・政治・理論上の総括対象を一向過渡期世界論——一・二・一八路線の止揚に設定して共産主義者同盟の革命運動を総括した総路線——「小ブル革命主義をプロレタリア革命主義へ」「毛沢東思想を支持して、反スタトロツキズムと毛教条主義を同時相互止揚」した反帝反米・反社帝のプロレタリアート独裁・社会主義革命路線、経済主義とテロリズムを排した建軍—攻撃的蜂起の陣型をもつ労働者単一党の結党へと煮つまりつつあるし、又、煮つまらせてゆかねばならない。この単一党を勝ちとる方策は、綱領討論—論争を保障した、独立・自主、相互批判、相互援助、相互譲歩のプロレタリア武闘共闘の中に見出されなければならない。このプロレタリア単一党の事業の第一段階を実現し抜くこと、そして、プロレタリア単一党—プロレタリア武闘共闘の陣型をもつて皇太子訪

沖——天皇訪米阻止闘争を闘いぬくこと。このことこそがインドシナ革命戦争の大勝利に実践的に呼応する道であり、インドシナ——第三世界人民の決起に連帯する道である。

(一九七五年五月)

過渡期社会論・基礎

毛沢東思想・中国革命を、プロレタリア革命派の立場から正しく評価・摂取するために。

酒井隆樹

——反スタ・トロツキズムと毛沢東教条主義同時相互止揚——

はじめに

現在中国が、国内には批林批孔運動、国外的には人民外交として強力に展開している反帝反社帝の斗いは、歴史的、世界的にみて、一体いかなる位置を占めているのだろうか？

そして、その政治経済学的根拠となっている、社会主義の国内的建設、社会主義社会に於ける「階級・階級矛盾・階級斗争」の残存、「資本主義と社会主義との二つの道の斗争」の存続、プロレタリア独裁の強化、等の理論と実践は、マルクス・レーニン主義の立場・方法・観点から把え返してみても、一体いかなる位置を占めているのだろうか？ これらの問いに、世界革命戦争の主体IIプロレタリア革命派の立場から答え切ること、これがこの小論のテーマである。

われわれが毛沢東思想・中国革命に評価・検討を加えようとする時、今なお、得体の知れない壁にブチ当たつた。それは、ほかでもないとりわけ日本に於いて特殊に「発展」してきた反スタ・トロツキズムの立場・方法・観点、及びその影響を強く受けて「発展」してきた小ブル革命主義「左」翼空論主義・日和見主義の立場・方法・観点である。そして、この壁を乗り越え得ない人々は、毛沢東思想・中国革命が、かかる立場・方法・観点をもってしては到底測り切れない深さと広さ、加えて現実の重みを持ち、彼らからすれば「常識」とも思えることを見事に打ち砕いているが故に、これに反発

が、反論への布石のつもりだろう)、神がかりの「プロレタリア階級の独裁」(資本主義批判抜き「プロ独」とは、一体どんな代物なのか？ お題目でしかないからこそ、「人民独裁」から「プロ独」への乗移りもできたのだ)を掲げて、唯一の「党派性」にしようとしている革左派(神)にくみするものではない。青年レーニンが、マルクス主義とナロードニキとの思想・路線的、理論・実践的相異の本質は、資本主義批判に於ける立場・方法・観点的相異なることを暴露し、ロシア資本主義の具体的分析を通して、精神的な論争を組織していったのは、何の為だったのだろうか？ まさか、シベリヤでの暇つぶしだったというまい？

第一節 毛沢東思想・中国革命の歴史的・世界的地位

毛沢東思想とそれに指導されて達成され、今も継続されている中国革命——或いは、中国革命とその中で生まれ、成長・発展をちかとしてきた毛沢東思想——は、歴史的・世界的にみて、一体いかなる位置を占めているのだろうか？

結論。毛沢東思想・中国革命は、過渡期世界における半封建・半植民地という歴史的・場所的特殊性、スターリニズムの制約を受けていた世界革命戦争の防禦段階に於いて獲得された理論と実践という歴史的制約性もちつつもすぐれて実

し、旧来の立場・方法・観点にしがみつぎ、機械的に「スターリニズム」、「非マルクス・レーニン主義」等のレッテルをはりつけて、それで満足してしまふのである。しかし、エンゲルスが書いてるように、マルクス・レーニン主義の立場・方法・観点に立って世界観・歴史観を築き、革命理論、実践を展開しようとする望む者なら誰でも、「経済学的にみて形式上誤っていることも、世界史の立場からすれば正しいことがありうる」、「経済学的にみて形式上誤っているものかげに、一つのきわめて真実な経済的内容がひそんでいることがありうる」という謙虚さをもって、具体的素材に具体的分析を施し、この本質をひき出さねばならない。だから、われわれは、この反スタトロツキズムという古い殻を打ち破って、真のマルクス・レーニン主義者IIプロレタリア革命派として、自己を蘇生させる必要があるのである。

ところで、この小論では、資本主義批判を展開する予定はない。しかし、だからと云って、それが、「マルクス主義の眼目は、デタラメな『資本主義批判』ではなく、プロレタリア階級の独裁である」というデタラメな見解——これらの人々はかつては、「ブンド系諸君の資本主義批判」なるものをデッチアゲ、十把一からげに「批判」しようと思息荒くしていたが、論争に勝ち目が無いことを思い知らされるや、きびすを返して「マルクス主義の眼目は……」として、マルクス主義から経済学の領域を切り捨て(「デタラメな」という限定

践的に、マルクス・レーニン主義を継承・発展させ、スターリンの「二段階戦略」の右翼的段階固定化、世界革命と階級斗争抜きの小ブル日和見主義の「一国社会主義」固定化、等を克服・止揚し、プロレタリア文化大革命(批林批孔運動の「二つの道の斗争」)によって、世界性と一國性、段階性と連続性の矛盾を解決しつゝある、そのような歴史的・世界的意義と過渡性をもっているのである——毛沢東思想・中国革命の理論と実践は、その歴史的・場所的制約を部分性・過渡性としてもっていることを考慮に入れても、ブルジョア・小ブルジョアは勿論、トロツキズム反対派や毛教条主義・ソ連派修正主義のスケールでは測り切れない深さと広さをもっている。従つてわれわれは、弁証法的唯物論・史的唯物論・資本主義批判と科学的社会主義をもつてするマルクス・レーニン主義の立場・観点・方法にしっかりと立って、歴史的・具体的諸条件を具体的に・実践的に分析して、その意義と過渡性をしっかりとつかみ、世界革命戦争の主体IIプロレタリア革命派として正しく評価し、批判的に撰取し切ることが問われている。万が一にも、トロツキズム反対派や毛教条主義・ソ連修正主義のように、手持ちのチップケなスケールに合わせて、対象を勝手に縮めたり、ハミ出した部分(の方が大きい)を切り捨て、しまつたりすることは許されない。

① 毛沢東・中国共産党の定式化した「新民主主義革命」は、過渡期世界の世界的階級攻防の中で、後進国に於いて勝

ちとられるべき、マルクス・レーニン主義の立場・観点・方法に立ったプロレタリアート（共産党）が指導権を握り、継続革命を前提としての、社会主義革命へむけた民族解放民主主義革命を指している。そして、社会主義革命への継続革命

の根拠地化とは、権力奪取後の民族民主斗争を、プロレタリアート・共産党の指導の下に、社会主義革命（プロ独）に連続的・段階的に発展させていくプロ独運動を組織することに外ならない。これらの関係は、毛沢東が正しく指摘しているように、過渡期世界においては民族解放民主主義革命が、世界社会主義革命の一環として、社会主義革命への継続革命を限り、国際反革命の侵略とそれと結びついた買弁ブルジョアジーの復古の企図を撃退することはできず、従って民族解放民主主義革命それ自身の勝利も覚束ないこと、社会主義革命は、中国の場合「新民主主義革命」として定式化される権力奪取の政治革命——それに打続くプロ独運動は、プロ独樹立社会主義革命としての、その直接の不可分の継続——を跳び越えては物質化しえないこと、従って、この革命の指導権は、最初からプロレタリアート・共産党が握って手放してはならないことにある。そして、このような把握によってのみ、実践的にスターリニズムを克服・止揚することができたのである。その理論的深化は、六〇年代末〜七〇年代前半のベトナム・インドシナ革命を先頭とする世界革命戦線の政治的・軍

事的勝利によってもたらされた、世界革命戦争の対峙段階への到達と、それに伴う持久的対峙戦略の採用に当たっての党内斗争の思想・路線斗争を待たなければならぬ。

その背景となった世界的階級情勢を概観してみれば、資本主義が帝国主義段階に到達し、腐朽性と寄生性を深めながら、経済的・社会的矛盾を植民地の強搾取・強収奪によって転嫁させ、戦争経済を恒常化させつゝあり、また主体的条件としては、ロシア革命の勝利を契機として打ち倒された新たな世界的階級情勢（過渡期世界）の中で、世界プロレタリアートは、階級斗争を、単一不可分の世界革命戦争として、能動的に組織しつゝあった。こうした情勢の中では、中・後進国における民族解放民主主義革命も、旧来のブルジョア革命の質と形態をもっては斗い切れなくなっていた。即ち、帝国主義の世界侵略・分割戦争と、社会主義的世界的斗いの前進の中で、ブルジョア革命勢力は、封建主義に対するその限りでの相対的進歩性・指導性（民族国家を代表する勢力として諸階級を包括しうる）さえ失い、最左翼に位置していたプロレタリアートと貧農層を中心とする農民の斗いを包摂し切れず、また社会主義と結合しつゝあるプロレタリアート・農民に階級的危機感を抱いて反動化し、帝国主義の鎖につながれ買弁官僚化し、そのことによって、自ら開始した民族解放民主主義革命の敵対物へと転化したのである。こうして、過渡期世界に於いては、民族解放民主主義革命は、その指導権を

社会主義と結合したプロレタリアート・農民の手に移し、世界社会主義革命の構成要素として、社会主義革命に継続・発展させることによってのみ、前進し、勝利をわがものとする事ができることが明らかにされたのである——これを最初にマルクス主義の立場・観点・方法によって定式化したのがレーニンであった——。そして、この民族解放民主主義革命の成長転化過程を典型的に表現していたのが中国革命であった。即ち、辛亥革命、五・四運動、国民党の変質、中国共産党における毛沢東の指導権確立の過程での斗い、等々。

⑨ そして、社会主義革命（プロ独）・社会主義建設の斗いの中で、毛沢東・中国共産党は、スターリンの世界革命と「階級斗争」抜きの小ブル日和見主義「一国社会主義」と、トロツキーの、社会主義革命と社会主義建設の斗いを全て、「世界革命」に還元して社会主義の一国的建設を放棄する小ブル革命主義とを同時に克服・止揚し、世界革命の根拠地建設の斗いとして世界革命と国内「階級斗争」（社会主義革命）を結合し、同時に、生産関係の社会主義化と生産力の発展の水準に於いて、社会主義社会として存在し得ることを論理化しえた。すなわち、この観点から、スターリンの世界革命（根拠地化）と「階級斗争」（文化革命）抜き「一国社会主義」が、「生産手段国有化」社会主義・生産力主義・「社会主義無階級社会」をもって現代修正主義に転化したことを認識し、その後さらに社会帝国主義に転化させていっ

たフルシチョフ・ブレジネフと斗い、プロレタリア文化大革命として、社会主義革命・社会主義建設の斗いにおけるプロ独の下での「階級斗争」、資本主義と社会主義の「二つの道の斗争」を推し進めてきたのである。

かゝる過渡期社会・社会主義社会論の理論的成果は、新民主主義革命達成後、人民民主主義独裁（プロ独の端緒）の下で、社会主義経済と資本主義経済の混合——一種の国家資本主義を基礎とする人民民主主義社会が形成され、そして、ここから不断に形成される資本家勢力・資本主義への逆転を狙う勢力と、経済の社会主義化の中で大規模に形成されるプロレタリアート——社会主義革命の徹底化を要求する勢力との斗争において、毛沢東・中国共産党が、後者に立脚し、整風運動・反右派斗争・走資実権派との斗い・プロレタリア文化大革命、等々として、プロ独の強化、社会主義革命の徹底化、社会主義建設の推進の中で勝ちとられてきたものである。

そして、ここから、過渡期世界に於ける社会主義社会に於いては、プロ独と生産関係の社会主義化をかちとり、生産力の一定の発展をかちとったとしても、——資本主義社会から社会主義社会への強行転化を成し遂げる「革命的転化の時期」を「政治的国家」——プロ独の下で勝ち抜いた、このような社会が、不完全ではあれ、社会主義社会であることはいかぬ——、帝国主義の支配する世界市場から召還することは不可能であり、故に、不断に国際反革命の有形無形、直接間

接の侵略の企図・攻撃を受け、また、資本主義・ブルジョア社会の母胎が「生産関係と生産力との矛盾」、「上部構造と経済的土台との矛盾」の中に残存し、とりわけ「労働の量に応じた分配」という「ブルジョアの平等の権利」、従って不平等を前提とする商品交換価値法則が貫徹されている「より低い段階」では——中国共産党は、中ソ論争（「第九評」など）以来、ソ修に於ける賃金格差の拡大について暴露・批判してきているが、「労働の量に応じた分配」そのものが「ブルジョアの平等の権利」に過ぎず、従って不平等を前提としていること、及びその解決の方向性について、今のところ理論化し得ていないようだが——、不断に資本主義復活勢力が再生産され、資本主義へ逆転させる力が形成され、プロレタリア革命勢力との間に「階級・階級矛盾・階級斗争」が存在せざるを得ず、従ってこれを、プロレタリア革命派に依拠して、「二つの道の斗争」として定式化し、プロ独の強化とともに、革命的・大衆的斗争に高め、広めたことの積極的意義を見出さなくてはならないのである。

⑥ このような観点から把え返すならば、中国人民外交が、六〇年代末・七〇年代初のベトナム・インドシナ革命を最先頭とする世界革命戦線の勝利によって到達した世界革命の対峙段階に於いて、世界革命の根拠地としての中国が、対峙段階の政治的・軍事的成果を踏まえつつ、反帝反修のプロレタリア革命党とその勢力を帝国主義・社会帝国主義国内に建設

・強化し、世界的反攻戦を準備する持久的対峙戦略を採り、その中で、その重層的・多面的戦線の一部として、第三世界を民主主義レベルで結束させ、米ソの世界支配構造を打破し、孤立させ、追い詰め、同時に欧・日帝国主義を米ソから、また相互に分断し、包囲し、弱体化させつつ、それを長期的・持久的に維持・発展させることによって、世界社会主義革命の一部を成す各国革命の自主的・自立的成長を促し、助け、支える革命的役割を現に果たしつつあることは、全く明らかである。第三世界人民の斗いに下駄を預けていた為に、世界革命戦争の対峙段階への到達を認識し得ず、あらゆることを口走り、敵対しつつある反スタ・トロツキズムこそ、少し真面目に、自力で革命の戦場を伐り拓き、世界革命戦争の成長、発展に寄与する道を探すべきなのである。毛教条主義もまた、持久的対峙戦略の重層的・多面的全体の一部として理解することができず、機械的・呪文的に唱えるのみである。

⑦ それでは、毛沢東思想・中国革命の限界（部分性・過渡性）はどこにあるのか？

それは、既に指摘してきたように、その生成過程に於いて、過渡期世界の半封建・半植民地という歴史的・場所的特殊性（資本主義の未形成・未成熟）、スターリニズムの制約を受けていた世界革命戦争の防禦段階という政治・組織的実践上の制約性をもっていた為（その後、コミンテルンの解散によって、直接的・組織的には解放されたとはいえず）、資本主義

批判・帝国主義批判・現代帝国主義批判を理論化し切れていないこと、それ故に、帝国主義国内の階級構造・階級関係・権力構造等の科学的分析・把握をなし切れていないこと、それ故、過渡期世界に於ける帝国主義本国プロレタリアートの斗いを軸とした世界革命戦争の勝利の展望を伐り拓くことができず、従って、とりわけ帝国主義本国に根深く巢食っている反スタ・トロツキズム、毛教条主義に対して、理論的裏付けのある根底的批判を組織することができないことにある。

それ故に、現代過渡期世界Ⅱ世界革命戦争に於ける、世界プロレタリア人民の勝利的前進という新たな国際階級攻防関係を規定されて、帝国主義が、対立矛盾を抱えながらも米帝を中心とする国際反革命の複合的支配体制をとっていることを認識し得ず（或いは、過小評価し）、反米反ソという正しい世界戦略を提起しながらも、それを一面化し、米帝以外の帝国主義をも「（第二）中間地帯」と位置付け、中立化の対象としてしまい、特に「第二中間地帯」に於いて、そのプロレタリア社会主義革命の勝利を世界革命の勝利の日まで無期延期し、彼岸のものとする右翼日和見主義の毛教条主義を批判し切れずにいるのである。帝国主義本国に於けるプロレタリアートの革命路線は、「反米愛国」の民族解放民主主義革命ではなく、自国帝国主義打倒・プロ独樹立を主要側面（政治）とした反帝反社帝のプロレタリア社会主義革命でなければならぬ。既に述べたように、われわれは、反米反ソ世界

戦略の下、第三世界の民主主義レベルでの統一戦線を組織し、米ソを孤立化させ、追い詰め、弱体化させることの歴史的・革命的意義を認め、支持するが、そのことをもって、資本主義批判・帝国主義批判・現代帝国主義批判を緩めたり、差し控えたりすることは許されぬし、自国帝国主義打倒・プロ独樹立の社会主義革命の世界革命戦争に於ける意義を捨象することは許されないのである。従って、第三世界の統一戦線も、プロレタリア指導下の社会主義革命への成長・発展を前進・勝利の展望とし、世界革命戦争の反攻を準備する外縁であることを前提としてのみ、支持するのである。

毛沢東思想・中国革命が、その限界（部分性・過渡性）を克服し、過渡期世界Ⅱ世界革命戦争の対峙段階に於ける革命理論Ⅱ実践としての飛躍・前進・普遍化をかちとる上での妨害物となつていのは、ここでもスターリニズムである。スターリニズムを根底的に批判し尽くすことには——中国革命を通しての毛沢東・中国共産党の斗い、整風運動・中ソ論争・プロレタリア文化大革命・批林批孔運動、等の斗いの中で一国的には実践的に一応解決されたが、世界的・歴史的には手つかずのまゝであり、放っておけば、世界革命戦争攻防の進展の中で、必ず中国自身に逆流せざるを得ない——、帝国主義本国に於けるプロレタリア社会主義革命を楨杆とする世界革命戦争攻防の中で、民族解放民主主義の小ブル革命主義「反米愛国」人民戦争路線や、第三世界人民の勝利・前進に

下駄を預けて自国革命を彼岸視するズブズブの合法主義「中立化」要求路線を批判し切れず、その間をブレ続けざるを得ないのである。

いまだに、われわれを反スタ・トロツキズムのピンボケ眼鏡を通して見て、「毛沢東への屈服」を云々して喜んでいる諸君がいる。われわれは、毛沢東万才主義に乗り移ってコト足れりとしている訳ではない。要は、マルクス・レーニン主義の立場・観点・方法に立って観た時、毛沢東思想・中国革命の世界的・歴史的位置はどこに定められるのか、マルクス・レーニン主義の立場・観点・方法からする批判的検証をいかに組織するのか、とりわけ、新しい段階に到達した過渡期世界Ⅱ世界革命戦争攻防の中で、いかにして止揚・発展・普遍化をかちとるか、なのである——この方法的立場・観点が「毛沢東への屈服」であるならば、大いに「屈服」しようではないか——。毛沢東思想・中国革命は、その生成過程に於けるその歴史的・場所的特殊性・制約性に規定されて、局地的・部分的・過渡的性格をもっていたにせよ、スタ・トロの「左」右の日和見主義・小ブル革命主義の反動化を受入れず、克服し、もってマルクス・レーニン主義を正しく継承・発展させ、スタートロ論争の実践的止揚をかちとったのである。である以上、われわれの任務が、毛沢東思想・中国革命を支持しつゝ、マルクス・レーニン主義の立場・観点・方法に立って把え返し、継承・止揚・発展させ、現代過渡期世界Ⅱ世

プロレタリア革命党建設とプロレタリア社会主義革命の展望を打出し、反米反ソとともに自国帝国主義打倒・プロ独樹立・社会主義革命を打出すことによつて、「反米愛国」路線を克服し、過渡期世界Ⅱ世界革命戦争攻防の革命理論Ⅱ実践を確立しない限り、スターリニズムの亡霊によつて、社会主義社会に於ける「階級・階級矛盾・階級斗争」の存在を否定し、資本主義と社会主義との「二つの道の斗争」を放棄し、資本主義への逆流と資本主義勢力の復活に道を開かせられる可能性が、消滅したり死滅したりすることはないのである。

それでは次に、いよいよ「社会主義社会の一国的建設は不可能なのか、一国社会主義は必ず社会帝国主義へ変質・墮落するのか?」、「社会主義社会に『階級斗争』は存在しないのか?」、「階級斗争」が存在する社会は社会主義社会ではないのか?」、という二つの問いに解答を与えたい。当面われわれが批判を集中しなければならぬ傾向は、「反スタートロツキズムの立場からする、歴史的・具体的諸条件抜き」の、「あるべき姿」論をもつての「批判的批判」であり、彼らがマルクス・レーニンの「正当な継承者」ヅラをしてシャシャリ出てくる以上、われわれもまた、彼らの神棚からマルクス・レーニンの文献を借りてきて、いささかの「權威」づけをする必要があるだろう——以下、私は、引用を、ほとんど、レーニン『国家論ノート』（大月書店、一九七二年版）からとつ

界革命戦争攻防の対峙段階に於ける革命理論Ⅱ実践としての普遍化・豊富化をかちとることにあることは、明らかだろう。そして、この任務は、世界革命戦争の対峙段階の新たな階級情勢の中で、とりわけ帝国主義本国に於けるプロレタリア社会主義革命の前進が問われている中で、毛沢東思想・中国革命が、その限界性（過渡性）を露呈させ始め、自然発生的に——しかし国際階級情勢の変化から必然的に——湧きあがってきた第三世界勢力の資本主義・帝国主義・社会帝国主義への告発・批判を主体的に受取めて、自らも含めて再組織する中で克服・止揚する方向性はあるとはいえず、いまだ理論的に応え切れず、直感的な実践的解決を先行させている段階では、すぐれてわれわれ、世界革命戦争の主体、帝国主義本国プロレタリア革命派に課せられた任務なのである。毛沢東思想・中国革命が、現在のように批林批孔運動を通して、林彪に代表される小ブル革命主義の「左」翼空論主義の反帝一元論——体制間矛盾論にしがみつき、ソ修社会帝国主義批判を欠落させた、帝国主義・社会帝国主義国内のプロレタリア社会主義革命抜き思想の「政治的極右」——や日和見主義右派Ⅱ資本主義復活勢力のソ修式「平和共存」路線——プロレタリアートを裏切り、社会主義「階級斗争」の進展に恐れをなし、米帝に屈服する——との一個二重の思想・路線斗争を大衆的に組織・展開していることは、一つの、しかし大きな明るい材料であるとは云え、帝国主義・社会帝国主義国内に於ける

た。それは、これが、国家論に関するマルクス・エンゲルスの考察が網羅されていること、レーニン自身の考察が評註として含まれていることによつて、マルクス・レーニン主義国家論を汲みとるのに適していたからである。

解答を与える前に、先ず次の点を確認しておきたい。即ち、マルクス・レーニン主義の立場・観点・方法に立って世界観・歴史観を築き、革命理論Ⅱ実践を展開しようと望む者なら誰でも、「経済学的にみて形成上誤っていることも、世界史の立場からすれば正しいことがありうる」、「経済学的にみて形成上誤っているものか、一つのみわけて真実な経済的内容がひそんでいることがありうる」（『国家論ノート』九六頁；『哲学の貧困』へのエンゲルスの序文から）、という謙虚さをもつて、具体的現象の具体的分析を通して、コトの本質を抜き出さねばならないということである。一体誰が、反スタートロツキズムに、彼らの歪められ、縮尺されたスケールで現実を測るといふ愚挙を許したのか？ 彼らが、非マルクス・レーニン主義のスケールを捨て、マルクス・レーニン主義のスケールを手にしないう限り、現実を、あるがままの姿で見ることさえできないだろう。

第二節 社会主義社会の一国的建設は不可能な

のか——一国社会主義は必ず社会帝国主義に變質・墮落するののか？

共産主義社会（特に断らない限り、われわれは、「共産主義社会」という時、レーニンに従って、「より低い段階」の共産主義社会II社会主義社会を前提として、「より高い段階」の共産主義社会を指すものとする。但し引用の中では、マルクス・エンゲルスは勿論、レーニンも、「共産主義社会」と云う時、二つの段階を包括する総称として用いているので、間違わず読み分けてほしい）の成立が、世界的規模に於いて初めて可能であり、一国的規模で「共産主義社会への移行」を云々することが、悪き修正主義であることは、いうまでもない。しかし、それでは、共産主義社会の「より低い段階」II社会主義社会の一国的建設も不可能であり、一国的規模で「社会主義社会への移行」を云々することは修正主義だとする立場が正しいのだろうか？ これは誤っている。これは、マルクス・レーニンが「共産主義社会の二つの段階」を経済的成長・発展の度合いに応じて設定した歴史的・革命的意義理論的・実践的意義を捨て去り、社会主義社会・共産主義社会の建設を彼岸視する、「左」翼空論主義・日和見主義の立場である。

は、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応して、また政治上の過渡期がある。この過渡期の国家は、プロレタリアートの革命的独裁以外のなにもでもありえない。V（サイドラインはマルクスのもの——酒井）……

だから、プロレタリアートの独裁は△政治上の過渡期Vなのだ。この時期の国家もまた国家から非国家への、すなわち△もはや本来の意味の国家ではないVものへの、過渡であることは、明らかである」（『国家論ノート』三三三〜三四頁、『ゴータ綱領批判』及びレーニンの評註から）。

従って、社会主義社会とは、「資本主義社会から共産主義社会への革命的転化の時期」を経て、共産主義社会（「より高い段階」）の成立へ向けて、「死滅しつゝある国家」の下で社会主義革命と社会主義建設を推し進める、世界的広がり（の可能性と必然性）をもった、「相当長期にわたる歴史的段階」（毛沢東）であり、生産関係の社会主義化、生産力の発展、労働の社会主義的組織化、等、社会の経済構造及びそれによって制約される社会・文化の成長・発展の程度（質と量、形態の變化）に応じて、空間的にも時間的にも極めて不均等な、不平等な構造をもつ、世界史的概念である。

従って、共産主義社会の成立直前の社会主義社会は、精神労働と肉体労働との対立の解消、いかなる強制もない労働、生産力の高い発展、等によって「各人はその能力において、各人にはその欲望において」の原則が確立されつゝある、

レーニンは、「共産主義社会の二つの段階」を次のように特徴づけている。即ち、

「より低い（△第一のV）段階——各人が社会に給付した労働の量に△比例してのV消費手段の分配、分配の不平等はまだ大きい。△ブルジョア的権利の狭い視界Vはまだ完全に踏み越えられてはいない。これにNB!!（半ブルジョア的な）権利とともに、（半ブルジョア的な）国家もまだ完全には消滅しないことは明らかである。これに注意!!

やはり強制の一形態：△働かなければ食うことができないV
NB
労働は欲求となり、いかなる強制もない

△より高いV段階——△各人はその能力において、各人にはその欲望においてV。これはいつ可能になるのか？ (1)精神労働と肉体労働との対立が消えさり；(2)労働が第一の生命欲求となり（NB：労働の習慣が強制なしに規範になり!!）；(3)生産力が高い発展をとげ、等々したときである。国家の完全な死滅がこのより高い段階においてはじめて可能であることは、明らかである。このことにNB」（『国家論ノート』三七頁；『ゴータ綱領批判』へのレーニンの評註から。強調はレーニン、△……Vはレーニンの引用を指す）

ところで、「△資本主義社会と共産主義社会とのあいだに

共産主義社会とほとんど近似な姿をとっていることは明らかであるが、しかし、そのような「それ自身のうえに発展してきた共産主義社会」ではなく、「たったいま資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会」こそが問題なのである。これを「あるべき姿」から把え返して、「不純」なものと断定し、共産主義社会の「より低い段階」としての社会主義社会の範疇から切り捨てることは許されないだろう。

「△ここで問題にしているのは、それ自身の土台のうえに発展してきた共産主義社会ではなく、反対に、たったいま資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会である。だから、この共産主義社会は、あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、それが生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている。したがって、個々の生産者は、彼が社会に与えたものと正確に同じだけのものを——さまざまな控除をしたうえで——返してもらおう……V

△個人的消費手段のほかに、なにも個々人の所有に移ることはできない。V△しかし、個人的消費手段の個々の生産者への分配にかんしては、商品等物価の交換の場合と同じ原則が支配するのであって、一つの形態の労働が別の形態の等しい量の労働と交換されるのである。Vこの平等な権利は、不平等を、実際上の不平等、人々のあいだの不平等を、前提している。なぜなら、ある者は強く、ある者は弱い、等々だからである（△もし不平等でないなら、別々の個人ではない

だろう。——ある者は他の者よりも多く受け取るだろう。ハしかし、こうした欠陥は、長い生みの苦しみを経て、資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会の第一段階では避けられない。権利は、社会の経済構造およびそれによって制約される文化の発展よりも高いものであることはけっしてできない。『国家論ノート』三五—三六頁；『ゴータ綱領批判』及びレーニンの評註から）。このような「欠陥」をもつ社会もまた、共産主義社会の「より低い段階」としての社会主義社会の範疇に属するのである。

資本主義社会から社会主義への転化を規定づけるメルクマールは、生産手段を「国家、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中」させることにある。いい替えれば、資本主義的な、生産手段の私的所有が、社会的に存在しているかどうか、にある。何故ならば、資本主義社会から社会主義社会への「革命的転化の時期」の「政治的国家」は、社会主義経済構造の基礎、或いは条件を強力的につくり出すが、即ち、「プロレタリアートは、その政治的支配を利用して、ブルジョアからつきつきにいつさいの資本を奪いとり、いつさいの生産用具を国家、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、生産力の量をできるだけ急速に増大させるであろう。しかし、これも「ハもちろん、これは、最初は所有権とブルジョアの生産関係とへの専制的な干渉によって、したがって、経済的観点

からすれば不十分で維持できないように思える諸方策によって、おこなうほかはないが、……」（『国家論ノート』四一頁；『共産党宣言』から）、都市・農村の小生産者の所有する生産手段に対しては、強制没収や強制買取による国有化ではなく、もっぱら説得と政治教育によって、彼ら自身の自主的な集団化・共有化・国有化を促し、進めることにあり従って、共産主義社会、或いはその直前の社会主義社会に至る迄の間、生産手段の私的所有が、資本主義の遺制として、遅れた地域、遅れた個人に残存することは避けられず、これを皆無だとして了うことはできないからである。然し、そのような遅れた地域、遅れた個人を抱え込んでいたとしても、その社会を社会主義社会と呼ぶことを妨げる要因とはなり得ないだろう。

ところで、レーニンは、先の引用（『ゴータ綱領批判』への評註）の中で、共産主義社会の「より低い段階」では、「（半ブルジョア的な）国家もまだ完全には消滅しないこと」そして「国家の完全な死滅がこのより高い段階においてはじめて可能であること」は「明らか」だとしている。それでは毛沢東・中国共産党の「プロレタリア社会主義」論が正しいのだろうか？ これは半分正しく、半分誤っている。しかし、その「半分」とは必ずしも1/2ではなく、大きく変わり得る。何故ならば、第一に、プロレタリア独裁が、徐々に死滅しながらも、「資本主義から完全な共産主義への過渡期の国家

（プロレタリアートの結合体）」（『国家論ノート』四四頁『住宅問題』から）として、「国家から非国家への、すなわちハもはや本来の意味の国家ではない。ハものへの、過渡」として、「半国家」として、社会主義社会の上部構造を占め続けねばならない、という点では正しい。が、他方、次の点を忘れてはならない。即ち、「資本主義社会から共産主義社会への革命的転化の時期」——云うまでもないことだが、この「共産主義社会」は、二段階の区別をしない総称である。——この時期に照応しての「政治上の過渡期」、「この過渡期の国家」としてのプロレタリア独裁の役割が、社会主義経済構造の基礎、或いは条件を強力的につくり出す為の、即ち、「生産様式全体を変革するための手段として」「ブルジョアジーからつきつきにいつさいの資本を奪いとり、いつさいの生産用具を国家、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアートの手に集中し、生産力の量をできるだけ急速に増大させる」ことにあり、しかも「これは、最初は、所有権とブルジョアの生産関係とへの専制的干渉によって、したがって、経済的観点からすれば不十分で維持できないように思える諸方策によって、おこなうほかはない」ことである。従って、資本主義社会から社会主義社会への「革命的転化の時期」の「政治的国家」としてのプロレタリアートと、社会主義社会の上部構造として「死滅しつゝある国家」としてのプロレタリアートとは、歴史的・社会的には、直接の連続でありながら、質的に異ったも

ので、イコールで結んで了う訳にはいかない。「革命的転化の時期」の「政治的国家」としてのプロレタリアートの理論・実践は、マルクス・レーニン主義の強烈な党派性であり、これを曖昧にして了うことは許されないのである。

しかし、とはいえ、中国の場合は、プロレタリアの端緒として、「人民民主主義独裁」を打ち樹て、その下で、継続的・段階的に経済・政治・社会の社会主義化を推し進め、プロレタリアへの転化を待ちとり、その下で、社会主義革命・社会主義建設の闘いを推し進めつゝあり、実践的に克服してきている訳で、誤りも、より小さな「半分」で済んでいる訳である。ところが、中国が、その主体のおかれていた歴史的・場所的特殊性——資本主義経済構造の未形成・未成熟——を理論的に分析し切れないまま、歴史的・世界的に普遍化しようとするれば——林彪にはその傾向があった——、その与える影響は甚大であり、われわれは、世界革命戦争の主体はプロレタリア革命派の立場から、しっかりとマルクス・レーニン主義の立場・観点・方法に立って、批判、論争を組織していかなければならない。

問題は、赤軍派の同志たちの間にも現われている右翼的日和見的立場からする「プロレタリア社会主義」論である。ある同志は、「資本主義→共産主義の間には、過渡期があり、それが政治的にはプロレタリア独裁と経済的には社会主義（能力に応じて働き、労働に応じてうけとる社会）である」

と書いている。この驚くべき初步的誤りは、これ迄みてきた『国家論ノート』からの引用で明らかであり、改めて検討する必要はない。結論のみ書こう。こゝでは、資本主義社会から社会主義社会（「共産主義社会のより低い段階」）への「革命的転化の時期」の「政治的国家」としてのプロ独の歴史・革命的意義は全く忘れ去られており（善意に解釈すれば、だ。私には右翼日和見主義の立場からの意図的修正とか考えられない）、資本主義・帝国主義を打倒すれば——否、それさえ忘れ去られつゝある——即座に、社会主義経済構造の基礎、或いは条件を強力的につくり出す為の「政治上の過渡期」を経ることなしに、社会主義社会に転化していくかのように願望する、臍抜けた根性がありありとしている。帝国主義国に於けるプロレタリア社会主義革命である以上、社会主義社会に先行する特殊なウクラウド形成が、不要であるばかりか、有害であり、——「政治的過渡期」をイタズラに長引かせる、相対的に反動的役割を果たす小ブル民族主義——、従って「人民民主主義独裁」を打ち出す「勇氣」も出てこなかった訳だが、「人民民主主義独裁」を取り去ってしまった「プロ独社会主義」論は、一体いかなる革命的意義・歴史の正当性を持ち得るのか？ 全くない。「一から一〇まで」誤りであり、一〇〇多修正主義である。口では毛沢東思想・中国革命の評価を云々しているが、これは、毛沢東思想・中国革命の顔にツバを吐きかける以外の何ものでもない。

彼らが「新々修正主義」として理論的「深化」をかちとる前に、必ず粉砕しなければならない。

参考の為に、マルクス・レーニン主義の重要な党派性である、資本主義社会から社会主義社会への「革命的転化の時期」の「政治的国家」としてのプロ独の位置についてのレーニンの定式を引用しておく。即ち、

「国家はプロ——資本——もつばら——たんじ例ルジョア 主義社会 金持ちと、プロ 外としての民主主義。それでは、本 レタリアートの 主義。それわすかな層と はかつて完全の国家 のための民主 であつたこと主義。貧乏 はない……」

国家はプロ——過渡——貧乏人の——ほとんど
 ロレタリア プロレタ ため、住民の 完全な、ブル
 アートに リアート 910のための ジョアジの
 必要 の独裁) 民主主義。金 反抗を抑圧す
 : 過渡型 持の反抗を強 る点でのみ制
 の国家(力で抑圧する 限された、民
 本来の意 味の国家 主主義
 ではない)

国家は必 Ⅰ—共産 Ⅱ—完全な、 Ⅲ—真に完全
 要ではな 主義社会 習慣となりつ な、習慣とな
 い。それ : 国家の つあり、それ りつつあり、
 は死滅す 死滅 ゆえに死滅し それゆえに死
 る。 つつあり、ハ 滅しつつある

各人はその能 ……民主主義
 力におうじて、 完全な民主主
 各人にはその 義はいかなる
 欲望におうじ 民主主義もな
 てVという原 いのに等しい。
 則に席をゆず これは逆説で
 りつつある民 はなくて、真
 主義 理であるノ」

（『国家論ノート』三四—三五頁；『ゴータ綱領批判』へのレーニンの評註から）——例によって、レーニンは、『国家論ノート』では、共産主義社会の「より低い段階」——社会主義の規定をまだ用いていない。しかし、この後すぐ、先に引用した「共産主義社会の二つの段階」の特徴づけを行っており、表中の「共産主義社会」が、段階区別なしの総称として用いられていること、従って「プロ独社会主義（共産主義の『より低い段階』）」なる修正主義と無縁であることは明らかである。

いさゝか一般論・抽象論に走りすぎたので、現代過渡期世

界世界革命戦争の中で、「二つの道の斗争」を通して、社会主義社会を建設し、なお、世界共産主義建設に向けて、国内・国際的闘いを統一的・継続的に組織している中国革命について、検討を加えてみよう。

中国革命の歴史は、過渡期世界の半植民地・半封建という歴史的・場所的特殊性の中で正しく解決されたプロレタリア革命の、即ち、プロレタリアートの指導の下での民族解放民主主義革命——「新民主主義革命」、「人民民主主義革命」から社会主義革命への段階的・継続的発展の、歴史である。人民民主主義社会は、プロレタリアートの指導下にあつたといえ、反帝反封建の、打倒の対象を帝国主義と買弁官僚資本地主階級に限定した革命の産物であり、経済的には、人民民主主義独裁（プロ独の端緒ではあれ）の下での国家資本主義——資本主義と社会主義の混合的経済——段階にあつた。従

って、経済政策を、基幹産業部門の国有化と大小民族資本の制限、独立小農民の私経営の許容におかざるを得ず、制限されながらも資本主義が温存され、都市は勿論、農村に於いても資本主義的分化が進み、資本主義的な階級・階級矛盾・階級斗争が拡大再生産されるが故に、資本主義への逆転、資本家勢力の復古の企図を撃退し、打ち砕き、さらに社会主義化を推し進める為には、プロレタリア大衆に依拠して、能動的・積極的に「二つの道の斗争」を再組織することが必要だつた。即ち、生産手段の資本家からの没収を平和的暴力的に進

め、国有化し（過渡期に「公私合営企業」等の形態）、手工業者・小経営農民の集団化（「協同組合」）を進め、資本主義生産関係を社会主義生産関係に改造し、人民民主主義独裁をプロレタリア独裁に成長・転化・発展させる、全社会的「二つの道の斗争」が、世界革命戦争の根拠地化の斗いと、同時一体的に展開されてゆかねばならなかった。

ところで、中国に限らず、現代過渡期世界に於いては、社会主義社会への移行後も、「死滅しつゝある国家」としてのプロレタリア独裁を守り、強化していかなければならない——これは「誤り」ではないのか？ 否、正しい。逆説ではなく、プロ独国家権力を強化することが、世界プロ独の樹立とともに、速やかに、それ自身を死滅させる保障になるのだ——。何故なら、第一に、帝国主義に支配されている世界市場と袂を分かつことはできず、それを通して、資本主義価値法則の影響を受け、国際反革命（と修正主義）の直接間接の包囲・攻撃を受け、例え防禦的意味に限定しても、対外的に「プロ独国家」として行動し、かつその権力を維持・強化する必要がある。レーニンがプロレタリア独裁を、「ブルジョアジーに對抗して国家を使用する／彼らの復古の企図を撃退する／革命戦争／民主主義の導入と擁護」、と特徴づけているが、世界共産主義革命の前進の爲には、国際反革命（と修正主義）帝国主義・社会帝国主義に対しても、積極的に「△国家▽、すなわち支配階級として組織されたプロレタリアート」とし

その経済的土台の上に社会帝国主義を「建設」することを許してしまうことになる可能性は、決してなくなりはないのである。

従って、毛沢東・中国共産党が、人民民主主義独裁の下では勿論、プロ独への移行と社会主義社会への転化をかつとつた後も、「階級・階級矛盾・階級斗争」が残存し、資本主義と社会主義の「二つの道の斗争」が存続すると主張し、世界革命戦争の根拠地化と社会主義革命・社会主義建設の、反帝反修の国内・国際的斗いを、統一的・継続的・持久的に組織しているのは、現代過渡期世界に於いて建設された——しかし一國の枠を越えることの困難な——社会主義社会のとりべき立場として、基本的に正しいし、歴史的・革命的意義、理論的・実践的意義をもっているのである。これを、歴史的・具体的諸条件を捨象して、「左」翼空論主義や右翼日和見主義の立場から、「解釈」し、「位置づけ」た人々が、その真実の姿をいかに歪めて描いてみせたことか、われわれは、考える時間を惜しんでいるかのような毛教条主義者の真似をする必要はないが、「休むに似た」考えをするほどヒマをもて余してもいい筈だ。

このようにみてくれば、毛沢東・中国共産党が、プロ独の端緒として「人民民主主義独裁」を打ち樹て、その下で——経済構造は、資本主義と社会主義の混合経済で、一種の国家資本主義の段階——継続的・段階的に経済・政治・社会の社

てその権力を使用し——その爲には「民族国家」としての体裁が必要——、彼らの侵略の企図を撃退し、逆に世界革命戦争の中で、民族的・民主的要求斗争も含めて、反帝反修の世界的斗いを、重層的・多面的に組織する必要があるのだ。第二に、「たつたいま資本主義社会から生まれたばかり」の社会主義社会では、「革命的転化の時期」の「政治的国家」プロ独の下で生産関係の社会主義化を確立しているとはいえず、それが生産力の発展の度合い・速度と矛盾し合い、上部構造では資本主義的社会関係、ブルジョア・イデオロギー、官僚制度、国家機構の欠陥、等々が残存し、一定の社会主義化をかちとつた経済構造と矛盾し合い、その間隙から、資本主義への逆転、資本家勢力の復古を企図する、主に思想・政治上の（経済的存在基盤を失った）「階級」・「階級矛盾」が生まれ、社会主義プロレタリアートとの間に「階級斗争」を必然化させるからである。そして、この「階級斗争」に於いて、プロ独権力が、世界共産主義革命勝利への展望を伐り拓き、と同時に、反帝反修の国内・国際的持久戦に於いても勝利的前進をかちとる正しい路線を貫徹し、「二つの道の斗争」の大衆的運動としての組織戦に勝利しつゝ、世界革命戦争の根拠地化、社会主義革命・社会主義建設の道をさらに進まなければ、資本主義的「階級」は上部構造を握り、下部構造を捕え、徐々に、資本主義への逆転、資本家勢力の復古を許してしまい、やがては、修正主義の国家資本主義へ移行・転化し、

社会主義化を推し進め、プロ独への移行をかちとり、その下で、引続き社会主義革命・社会主義建設の斗いを推し進めてきた、そして今も推し進めつゝある、そのような社会を「社会主義社会」と位置づけたことの正当性は、全く明らかであろう。

従って、本節の結論はこうである。「社会主義社会の一國的建設は不可能なのか？」否、可能である。「一國社会主義は必ず社会帝国主義に変質・墮落するのか？」否、反帝反修世界革命戦争の根拠地化と社会主義革命・社会主義建設の斗いを、統一的・継続的・持久的に、能動的・積極的に、大衆的な「二つの道の斗争」として、正しく展開・推進していく限り、社会帝国主義への変質・墮落を避けることができる。

そして、この「二つの道の斗争」に於いて、能動性・積極性・大衆性を失ったり、ためらったりすれば、それだけ、社会帝国主義への変質・墮落の可能性が大きくなるのである。従って、社会主義社会には「階級斗争」が存在するし、「階級斗争」の存在する社会を社会主義社会とすることは全く正しいし、そればかりでなく、社会主義社会に於ける「階級斗争」は、「二つの道の斗争」は、世界共産主義の勝利の日まで、姿を変え形を変えながらも存続し、われわれ、プロレタリア革命派は、主動的に、大衆的に、積極果敢に、この主に思想・政治面での持久戦を斗い抜かねばならないのである。いさゝか結論を先走りすぎてしまった観があるので、次に、これを補足する形で、検討を加えることにしたい。

第三節 社会主義社会に「階級斗争」は存在しないのか——「階級斗争」が存在する社会は社会主義社会ではないのか？

前節で、われわれは、社会主義社会に於いても、生産関係と生産力との間の矛盾、上部構造と経済的土台との間の矛盾が残り(或いは、新しい形態で生まれ)、その間隙から生まれ出た、主に思想・政治面での「階級・階級矛盾・階級斗争」が存在し、資本主義と社会主義との「二つの道の斗争」が存在し、世界的勝利(少くとも世界プロ独の樹立)までは、完全に廃絶し得ないこと、従って、プロ独を解体することもできないこと、を確認した。

レーニンが、「ベルン」黄色インタナショナルを批判して、次のように書いている。即ち、

「彼らは、プロレタリアートの独裁もまた階級斗争の一時期であること、階級斗争は、階級が廃絶されないかぎり避けられないものであり、資本が打倒された直後には、とくに激しく、とくに独特な形のものになって、その形態を変えろということを、認めるのを恐れている。政治権力をたたかいたったのちに、プロレタリアートは階級斗争をやめずに、階級の廃絶にいたるまでそれをつづけている。だが、云うまでもなく、それは違った環境のもとで、違った形態で、違った

とは、資本主義社会から社会主義社会への「革命的転化の時期」の「政治的国家」としてのプロ独を指しているのか、それとも、それを経た後の社会主義社会の上部構造としての「死滅しつゝある国家」を指しているのか、ここでは結論を出さず、そのまゝ次に進んでみよう。後の叙述で自ずと明らかになる筈である。

ところで、毛沢東は次のように言っている。「社会主義社会は相当長期にわたる歴史的段階である。社会主義というこの歴史的段階においては、なお階級、階級矛盾と階級斗争が存在し、社会主義と資本主義との二つの道の斗争が存在し、資本主義復活の危険性が存在している」(『北京周报』一九七四年八月一八；張洪崑「賃金の奴隷から工場的主人公に」からの孫引き)。さあ、毛沢東は、資本主義的階級概念を持ち込み、もって社会主義社会を修正主義に売り渡した、か？否、少くとも毛沢東自身は、社会主義社会に於ける「階級・階級矛盾・階級斗争」が、プロ独の下で、「違った環境のもとで、違った形態で、違った手段でつづけられる」ことを認識していることは、確かである。例えば、毛沢東はこういつている。「わが国の革命の時期における大規模な、あらゆるような大衆的階級斗争はすでに基本的に終わっているが、しかし階級斗争、主として政治戦線と思想戦線における階級斗争はなお存在しており、しかもまだひじょうに尖鋭である」(『毛沢東著作選』六一—六二頁；「中国共産党全国宣

手段でつづけられるのである」(『偉大な創意』、大月書店版『新版レーニン選集』第五巻、一七〇頁)。何故ならば、「プロレタリア革命後のはじめのころは、ブルジョアジーの反抗を打ち破り、搾取者に勝利し、彼らの陰謀(……)を鎮圧するという、主要かつ基本的な任務に、なににもましてわれわれが従事したのは当然であり、避けられなかった。しかし、この任務とならんで、同じように不可避に——さきに進めば進むほど、ますますそうなるが、——積極的な共産主義の建設、新しい経済関係、新しい社会の創出という、より本質的な任務が出てくる。

プロレタリアートの独裁は、……たんに搾取者にたいする暴力ではなく、また暴力を主とするものでもない。」(同前、一六八—一六九頁)

「プロレタリアートの独裁(ディクタトゥーラ)とは、このラテン語の科学的な、歴史的・哲学的な表現を、もっと平易な言葉に翻訳すれば、つぎのことを意味する。

特定の階級、すなわち都市の労働者、一般に工場労働者、工業労働者だけが、資本のくびきを打倒する斗争のなかで、その打倒の過程で、勝利を確保し強化するための斗争のなかで、新しい社会主義的な社会組織を創設する事業のなかで、階級を完全に廃絶するための斗争全体のなかで、勤労被搾取者の全大衆を指導することができる」(同前、一六九—一七〇頁)——こゝで言及されている「プロレタリアートの独裁」

伝工作会議における講話」)。さらに、中国共産党と中国人民がこれを、少くとも実践的に認識していることは、整風運動、プロレタリア文化大革命、批林批孔運動の大衆の高まりと広がりからも明らかである。この関係を認識し得ずにいるのが、トクトクと毛沢東の「非マルクス・レーニン主義」性を「証明」してみせる、反スタ・トロツキズムの「左」翼空論主義や、表面的言葉の上でのアテハメ、ウワスベリな理解で満足してしまっている、「左」右の毛教条主義に外ならないことは、今更言うまでもあるまい。

「だが『階級の廃絶』とはなにを意味するのか？ 社会主義者と自称する人々はみな、社会主義のこの究極の目的を認めているが、しかしけつしてすべてのものがこの意味をよく考えているわけではない——いや全くその通り——。「階級と呼ばれるのは、歴史的に規定された社会的生産体制のなかで占めるその地位が、生産手段にたいするその関係(その大部分は法律によって確認され文化されている)が、社会的労働組織のなかでのその役割が、したがって、自分の意のままにできる社会的富の分けまえを受けとる方法と分まえる大きさが、相異なる人々の大きな集団である。階級とは、一定の社会経済制度のなかで占めるその地位が違ふ結果、そのうちの一方が他方の労働を自分のものにするのできるような、人間の集団を言うのである」(『偉大な創意』同前一七〇頁)。即ち、レーニンに従って、階級概念を規定する三

つの指標、④生産関係、⑤分配関係、⑥社会関係、から把握してみるならば、社会主義社会に於いて残存する「階級」とは、プロ独とその下での一定の基本的生産関係の社会主義化によって、社会的存在を著しく弱められながらも、なお小規模生産の残存物の抵抗が存在し、「労働の量に応じた分配」という不平等（「ブルジョアの平等の権利」）を前提とした商品交換価値法則が貫徹され、生産関係と生産力との間の矛盾、上部構造と経済的土台との間の矛盾が残り（或いは、新しい形態で生まれ）、等々の中で、その間隙から生まれ出た、主に政治面・思想面での積極的・消極的な抵抗を続ける、そのような「階級」である。従って、既に経済的土台社会的存在を失った——とはいえ、「階級斗争」、「二つの道の斗争」に於いて正しい路線がとられず、プロレタリア革命派が敗北し、プロ独の上部構造が変質するようなことがあれば、急速な資本主義への逆流を組織し得るだけの条件は、社会主義社会そのものの不十分性・過渡性が内包している——、もはや本来の意味の階級ではない、擬制的な「階級」、「半階級」なのである。ところで、この「擬制的階級」、「半階級」が、一つの、政治経済学上の用語として用いられるべきなのだろうか？ これは、今すぐ結論を出す必要はないだろう。しかし、社会主義社会に於いて存在する「階級・階級矛盾・階級斗争」が、そのような内容をもっていることは、しっかりと把握されなければならない。それは、レーニ

プロレタリア革命派大衆に依拠しての「階級斗争」、「二つの道の斗争」の推進・展開することを指していることは、明らかである。

或いは蛇足かも知れないが、ここで、中国共産党・中国人民が、批林批孔運動の中で獲得しつつある、社会主義社会に於ける「階級・階級矛盾・階級斗争」、「二つの道の斗争」の存在についての、政治経済学的分析を通しての正しい認識について、それがよく現われている。港灣荷役労働者の討論から抜粋してみたい——われわれは、是非とも、この中国の大衆的論争の作風・規律を謙虚に学び、しっかりと体得する必要がある。

梁才通「毛主席はこう述べている——『社会主義の生産関係はすでに確立されて、生産力の発展とは照応しあっているが、それはまだひじょうに不完全であり、これらの不完全な面と生産力の発展とは、これまた矛盾しあっているのである』われわれ港灣の生産関係と生産力とは基本的に照応しあっているが、それはまだ不完全である。これらの不完全な面について、意識的に調整をおこなわないかぎり、生産力の発展をたえず促進することができない。……」

郭歴新「……上部構造は経済的土台から生まれたものであるが、それはまた経済的土台にたいし相対的な独立性をもっており、かつ、力強い反作用をもっている。生産手段共有制の確立は、社会主義の相互関係を発展させるための前提をつ

んのいう「半国家」概念と同じ扱いを受けるべきものだろう。それでは、社会主義社会に於ける「階級斗争」は、どのようにならなければならないのであろうか？ レーニンは、続けてこう書いている。即ち、

「階級を完全に廃絶するには、搾取者、すなわち地主と資本家を打倒する必要があるばかりでなく、彼らの所有を廃止する必要があるばかりでなく、さらに、生産手段のあらゆる私的所有を廃止する必要があり、都市と農村との区別をも、肉體労働者と精神労働者との区別をも廃止する必要がある。

（このような社会は、既に共産主義社会の「より高い段階」ではないのか？——酒井）これは、多年を要する事業である。これをなすとげるには、生産力の発展における大幅な前進が必要であり、小規模生産の数多くの残存物の抵抗（しばしば消極的な抵抗——それはとくに頑強であり、克服するのはとくに困難である）（そのようなのだ。これらの、消極的な、しかし根深く、シブトイ抵抗を引き出し、捕捉し、改造する為にも、積極的に大衆的「階級斗争」、「二つの道の斗争」を組織し、展開することが必要なだ——酒井）に打ちかつ必要があり、またこれらの残存物にもなる習慣と因習との巨大な力に打ちかつ必要がある」（『偉大な創意』同前一七〇—一七一頁）。——この「多年を要する事業」が、社会主義社会に於けるプロ独の維持・強化の下で、それと併行しての、

くり出したとはいえ、生産活動のなかで人びとがかならずしも社会主義の原則にもとづいて、相互関係を正しく処理できるとは限らない。わが国では、生産手段所有制にたいする社会主義的改造の面で、すでに基本的な勝利をかちとつたが、しかし、プロレタリア階級とブルジョア階級とのあいだのイデオロギー面でもどちらが勝ち、どちらが負けるかの問題は、まだほんとうには解決されていない。プロレタリア思想はすでに大多数の人びとから指導的思想として認められているが、ブルジョア思想はなお長期にわたって存在していくものである。労働者階級の内部にさえも、なおブルジョア思想の影響が存在している。

……相互関係を処理する場合、プロレタリア思想と主人公の態度をとれば、正しく処理することができ、ブルジョア階級の個人主義、本位主義思想をとれば、正しく処理することができないのである。したがって、われわれひとりびとりの思想が社会主義の生産関係、生産力の発展と照応しあっているかどうかの問題が存在するのである……」

劉光銀「労働者と労働者のあいだには、どんな思想で相互関係を指導するかという問題が存在している。われわれ管理員、幹部と労働者とのあいだでは、この問題がとくに目立っている。毛主席はわれわれに、『ブルジョア・イデオロギーの存在、国家機構における若干の官僚主義的作風の存在、国家制度のいくつかの環における欠陥の存在は、また社会主義

の経済的土台と矛盾しあっている」と教えている。

「(党利支部書記邵学康さんと機械化作業院の班長徐志成さんは発言のなかでつぎのように指摘した——生産関係と生産力との矛盾、上部構造と経済的土台との矛盾を正しく処理するには、路線がそのカギとなっている。路線の問題に指導者が注意をはらわなければならないばかりでなく、大衆も関心をもたなければならない。)」

邵学康「……社会主義社会では、生産関係と生産力とが、上部構造と経済的土台とが一方では照応しあいながらも、他方では矛盾しあっている。この問題は、なにによって解決されるのか、またどのように解決されるのか。ほかでもなく、マルクス・レーニン主義の路線に依拠しなければならぬ。社会主義の生産関係がうち立てられると、労働者大衆は国家の主人公となり、企業の主人公となったので、企業内の事柄は労働者に依拠しないと、うまく運営できない。……」

(『北京周报』一九七四年版一七；「政治経済学を学んで港湾をりっぱに運営する」；サイドラインは酒井による)

こゝ迄述べてくれば、われわれが、前節で、少し先走って出した結論は正しかった、と断言しても、それほど横着を決め込んでいるとは言えないだろう。最後に、わが「勇気」あふれる反スタ・トロツキズムの君へ、レーニンの言葉を贈りたい。

「……メンシェヴィキとエス・エルをもふくめたブルジョ

たにせよ、スタ・トロの「左」右の日和見主義、小ブル革命主義の反動化を受入れず、克服し、もって、マルクス・レーニン主義を正しく継承・発展させ、スタ・トロ論争の実践的止揚をかちとつたのである。と。こゝでは、それを、共産主義論・過渡期社会論からするスタ・トロ論争への批判を通して把え返してみよう。

共産主義社会は、「各人はその能力におうじて働き、各人にはその欲望におうじて受けとる」という原則に基づいて社会生活の営まれる社会である。ここでは、生産力が高い発展をとげ、精神労働と肉体労働との対立が消え去り、都市と農村、工業と農業の矛盾が止揚され、労働が第一の生命欲求となり(労働の習慣が強制なしに規範になり)、従って、人が人を支配し、抑圧し、搾取することはなく——階級矛盾は止揚され、階級そのものが廃絶されている——、男女間の矛盾対立も止揚され、経済・政治・社会・文化の如何なる強制力も必要なく、如何なる民主主義も必要なく、従って如何なる国家も必要なく——「国家の完全な死滅」——、人類が真に解放され、真に自由を享受しているだろう。このような社会は、資本主義・帝国主義(社会帝国主義)とその諸関係が全世界から一掃され、歴史的、民族的、地理的等々の障壁が突破され、結合され、単一化され、経済・政治・社会・文化・イデオロギー等々いかなる意味に於いても、資本主義への逆転、資本主義勢力の復活の可能性の生まれ得ない、世界的

ア・インテリゲンツィアはその本領どおりに、資本に奉仕し、うそ八百の論証をつゞけている。プロレタリアートの革命のまえには、彼らはわれわれを空想主義者だといって非難したが、革命後には、ありえないような早さで過去の痕跡をなくすようにわれわれに要求している！」

しかし、われわれは空想家ではない。われわれはブルジョアの『論証』の真価を知っており、また変革後のある期間には、慣習のなかに残る古いものの痕跡が新しいものの芽ばえよりも優勢であるのは避けられないことも知っている。新しいものが生まれたばかりのときには、いつでも古いものが、しばらくのあいだ、新しいものよりも強い。自然でも、社会生活でも、いつでもそうである。新しいものの芽ばえの弱さにたいする嘲笑、安っぽいインテリゲンツィアの懐疑論、等々は、すべて、実は、プロレタリアートにたいするブルジョアジーの階級斗争の口口であり、社会主義にたいする資本主義の弁護である。」(『偉大な創意』同前一七四頁)

第四節 スタ・トロ論争批判——共産主義論

過渡期社会論を通して

われわれは先にこう書いた。即ち、毛沢東思想・中国革命は、その生成過程に於いて、その歴史的・場所的特殊性・制約性に規定されて、局地的・部分的・過渡的性格をもってい

歴史的水準を獲得した時、初めて可能となる。従って、共産主義社会は、唯一世界共産主義としてのみ成立し得るのである。そしてまた、かゝる世界共産主義は、それに先行する世界社会主義の時期・段階を媒介としてのみ、獲得されるものである。何故ならば、先進国と後進国との経済的不均等性、国内外の民族間の矛盾、精神労働と肉体労働、都市と農村、工業と農業、男と女の分業関係とそれらの地域的・民族的不均等性は、資本主義・帝国主義を打倒すると同時に、完全に克服される訳ではなく、世界プロレタリアートは、世界プロ独の下での、生産関係の共産主義化と生産力の発展、「労働の量に応じた分配」を基礎として、共産主義革命・共産主義建設の斗いを、「二つの道の斗争」、「階級斗争」として、継続的・持久的に推進・展開していかねばならないからである。それ故、世界社会主義の段階に於いても、プロレタリアートとその党(世界党)の指導性が減少するようなことはないだろう。共産主義社会建設の「多年を要する事業」を担うことのできるのは、プロレタリアートとその党以外にはないのだから。

マルクスが規定した「資本主義社会から共産主義社会への革命的転化の時期」は、世界史の実際に於いては、ロシア革命の勝利で始まり、世界社会主義への転化で終わる、「資本主義から社会主義への世界的規模での移行期」として存在し、その過渡期世界では、資本主義と世界プロレタリアートとが

長期に亘って闘い、一国から数カ国へ、数カ国から数十カ月へと、徐々に資本主義国家（支配地域）が打倒されながら展開されてゆく世界革命戦争として斗われるのである。一挙に、世界的同時的に国際帝国主義の支配構造が打ち崩され、世界プロ独が打ち樹てられるものでも、また、各国がバラバラのまま、寄せ集めの算術的総和として、世界革命が展望されるものでもない。それ故に、過渡期世界に於ける社会主義社会は、それぞれの歴史的・地理的条件と、社会主義化されつつある生産・分配・社会の諸関係の照応と矛盾の程度（質と量、形態）に応じて、種々な段階（不均等な発展）を経つつ、他方、世界共産主義・世界社会主義の建設を目指すという意味で、共通の連続性の中に位置し、一國性と世界性、段階性と連続性の矛盾の中に存在している。そこで、社会主義社会の存立条件としての生産関係の社会主義化、生産力の一一定の発展をもちとった後も、「労働の量に応じた分配」という不平等（「ブルジョアの権利」）と国際反革命との結びつきによって不断に再生産される資本主義への逆転、資本主義勢力の復活の危険性が存在し、プロ独権力の維持・強化と同時に、主に思想・政治面での大衆的「階級斗争」、「二つの道の斗争」を組織し、同時に、世界革命戦争の根拠地化の闘いを組織し、その役割を果たすことよってのみ、社会帝国主義への道を断ち、共産主義革命・共産主義建設への勝利的展望をもった社会主義社会としての存続を許される、

衆とは結合し切れず、スタ・ブハ派に粉碎されてしまったのである。

これに対してスターリン（ブハーリン）が採用した「一國社会主義建設」路線は、国内的には、農民小ブルの不満に対してブルジョア的に対応し、ネップ政策を歪曲・拡大して適用し、クラークやネップマン等の資本主義復活勢力の活動を許容する階級協調、国際的には国際帝国主義との協調を旨とする路線であり、レーニン「二段階戦略」や「平和共存」等の政策を右翼日和見的に歪曲・固定化したものであり、農民小ブルに迎合することによってプロ独を骨抜きにし、階級斗争を通しての社会主義革命・社会主義建設、世界革命の根拠地化の継続的・持久的闘いを放棄したものであった。その結果、国内的には資本主義復活勢力をはびこらせ、しかしこれが反ソ反革命に転化するのを恐れて暴力主義的な農業集団化の「左」のブレを行い、国際面では、世界革命戦略の不在の故にドイツ革命に敗北し右にブレ、反ファシズム統一戦線、人民戦線、独露条約、中国国民党への支援一元化、等々を行ったのである。そして、ソ連は、「階級斗争」（思想・政治斗争）を通じての社会主義革命・社会主義建設・世界革命の根拠地化抜き、生産手段の国有化のみ（機械的・物質的）「社会主義」成立によって、形を変え姿を変えてはびこってきた資本主義復活勢力が「労働の量に応じた分配」を「質に応じた分配」に修正し、この不平等を経済的・社会的基礎とし

そのような位置関係にあるのである。

以上の如く、過渡期世界に於ける社会主義社会（乃至は過渡期社会）が内包している「連続性と段階性の矛盾」、「世界性と一國性の矛盾」を、「階級斗争」、「二つの道の斗争」を通して一個二重に克服・止揚していく路線から把え返してみれば、スタ・トロ論争の解明も、難しいことではない。

トロツキーは、この二重の矛盾を、プロ独を堅持しつつ、「階級斗争」を通じて解決すること、過渡期社会に於ける社会主義建設と根拠地化の継続的・持久的闘いに勝ち抜くことに耐え切れず、ロシアの後進性を過大評価し、固定的に把え、農民小ブルの社会主義的改造の闘いを放棄し、プロレタリアートを諸階級の指導的階級として組織し、思想的・政治的武装を強化することに失敗し、段階性の無視と工業化一辺倒で農民からの強収奪を許容し、矛盾対立を深め、揚げ、またアジア民族解放斗争を軽視し——レーニン「民族植民地問題」の無理解——、ロシア革命の維持と成長・発展を、西欧・先進国革命（世界革命）の勝利・発展に下駄を預け、国内社会主義建設を観念的・機械的な根拠地化に全て還元し、逆にその芽を潰してしまったのである。世界革命が成功しない限り、「一國社会主義」はおろか、プロ独国家の存続も不可能だとする、小ブル的願望の裏返し敗北主義、「左」翼観念主義・空論主義・日和見主義、プロレタリア人民不在の、大衆蔑視のペンシズムの故に、トロツキーは、プロレタリア人民大

て上部構造に浸透してくることによって、資本主義への逆転を方向づけられたのである。スターリンがこの矛盾を隠蔽して、「生産手段の国有化≠社会主義↓無階級社会」として、過渡期社会（≠社会主義社会）に於ける「階級・階級矛盾・階級斗争」の存在を否定し、超階級的な「独裁国家」支配に一元化したことが、その逆転への方向を決定的なものとした。そして、官僚・技術者・科学者・専門家・富農等の資本主義復活勢力に迎合し、やがて依拠して、この現代修正主義に反対する部分に対する恐怖政治を敷いていったのである。

従って、われわれのスターリンに対する評価（批判）はこうである。即ち、最初レーニンの思想・政治の理論・実践を忠実に継承しようとする志向は持っていたこと、しかし、非マルクス主義の小ブル性、マルクス主義の立場からする資本主義批判の不在、世界革命戦争戦略の統一的・包括的観点の欠落によって、レーニンの理論・実践を現実に適用することができず、過渡期世界の階級攻防の進展についていけず、ドイツ革命・欧州革命を敗北させ、アジア植民地に於ける民族解放民主主義革命に於いては、プロレタリアートの指導性を否定して敗北させ、自国の根拠地化と継続革命の闘いに敗北し、即ち、三プロック革命と、これを世界共産主義・世界プロ独をめざした世界革命戦争、世界党・軍・戦線の下に統合・組織化することに敗北し、それを隠蔽し合理化する為に反動化し、——連赤総括でもみたように、階級攻防の質的変

化があり、プロレタリア大衆が新たな質と形態の団結で闘いを展開しつつある時、これについていけず、古い思想・政治にシガミつこうとする遅れた部分は相対的に反動化し、それが進んだプロレタリア大衆との闘いの中で、さらに反動化する可能性は大いにある。遅れた部分は通例実権派の中から生まれ、その場合闘いの中で自己を改造することなく、反動化する可能性は、さらに大きくなるだろう——、現代修正主義・社会帝国主義への道を「伐り拓いた」のである。

トロツキーは、スターリンとスターリニズムの現代修正主義性を首尾一貫して暴露することによって、スターリンとコミンテルンのプロレタリア世界革命を敗北させ、裏切っていた現実の理論・実践を否定的なたちで突き出した点で、歴史的意義をもっていた。これを忘れる訳にはいかない。従って、われわれが、修正主義日共との闘いの過程で、反スタ・トロツキズムの影響を強く受けたこと自体は、避けて通ることのできない一つの関門であったともいえる。しかし、われわれが真面目にプロレタリア世界革命の勝利を考えるならば、しっかりとマルクス・レーニン主義の立場・観点・方法に立って、反スタ・トロツキズムを踏み越え、乗り越えて、進まなければならない。しかし、トロツキーの批判は、左翼反対派の空論主義・小ブル革命主義の立場・観点・方法に立っての批判であり——これは、社会民主党共産党(内)の外に於ける論争の中でも「一貫」していた——、理論的にも

級社会」としてプロ独を解体し、「階級斗争」、「二つの道の斗争」を放棄して、現代修正主義・社会帝国主義に道をあけ渡すことは、何れも誤りであること、従って、毛沢東・中国共産党の「社会主義下階級斗争存続論」こそが、現在最も理論的・実践的意義をもっており、スコラ的な「一国社会主義(可能・不可能)論争」を克服・止揚したもの、少くとも止揚しつつあるもの、であること、われわれは、こゝから出発しなければならぬこと、以上である。

実践的にも、それ以上のものには、決してなり得なかつたのである。

このように観てきた時、われわれは、次のように結論づけることができる。即ち、過渡期世界で部分的(一国的)に勝利をかちとった社会主義社会に於いては、プロ独権力の下で、生産関係が社会主義化され、生産力が一定の発展をとげたとしても、「労働の量に応じた分配」という不平等(「ブルジョアの平等の権利」)を前提とする商品交換価値法則が貫徹されていること、主に思想・政治面でのこつているブルジョア社会の残滓、遺制、国際反革命の直接間接の侵略の企図・攻撃によって、国内に資本主義復活勢力が生み出され、「階級・階級矛盾・階級斗争」が拡大再生産され、資本主義への逆転の危険性・可能性は消え去らないこと、それ故、社会主義社会のプロレタリアート(共産党)は、プロ独権力の維持・強化とともに、世界革命戦争の根拠地化と、それと一体の国内社会主義革命・社会主義建設の闘いを、大衆的「階級斗争」、「二つの道の斗争」としてプロレタリア革命派の側から能動的・積極的に組織し、継続的・持久的に推進・展開せねばならないこと、トロツキー的に、かゝる事態を悲観的に捉え、それを固定化し、社会主義建設を世界革命の勝利に全て還元してう敗北主義・日和見主義や、スターリンの如く、国際・国内資本主義勢力に妥協・屈服し、階級協調による国内「安定」をもって「社会主義」と称し、「社会主義Ⅱ無階

過渡期社会論

社会主義論と毛沢東思想 一向健

——反スタ・トロツキズム批判——

インドシナ半島の乾期大攻勢はロン・ノルかいらい政権をたちまち瓦解させ、南ベトナム全土を制圧し、ラオス全土の実質的掌握へと怒涛の進撃を果した。反革命権力者、將軍連のぶざまな亡命劇と反革命兵士群の人民をふみつける弱肉強食の潰走ぶり。これに対する解放勢力側の正しい政策にもとずいた人民の掌握ぶり、兵士の英雄性、勇氣、規律、解放軍へ協力した決起や革命政府への結集ぶり。かかる事態は、ブルジョア・マスコミの「難民苦」や「孤児救済劇」の茶番をふきとばし、真に人民を代表し正義の闘いを遂行しているのがだれであるかを一目瞭然にしてくれた。米帝等国際帝国主義の無力ぶりや敗北の糊塗策動、これに対する臨時革命政府、北ベトナム、カンブチア王国連合政府、中国、朝鮮民主主義

人民共和国等の毅然たる態度、そしてソ連社会帝国主義の動揺と曖昧きわまる対応、などとしてたち現われた国際諸勢力の世界的対抗関係の事態は、紛れもなく世界革命戦争の対峙段階が今また決定的に新たな段階に到達してきたことを示している。インドシナ革命戦争の大噴火は、中近東における米帝の今一つの反動的支柱たるサウジアラビアのファイサル国王暗殺、反革命拠点台湾の蒋介石の死、「韓」国の流動と朴政権の金芝河氏再投獄や人民革命党八戦士への死刑攻撃、あ

るいは再び炎上せんとする学生運動への治安維持法攻撃と反共合唱の必死の演出等々のより大きな波紋をつくりだし、この怒涛がアジア革命に対する反革命防波堤の極東帝国主義世界体制を破壊に導きはじめている。この決壊をくいとめるべく、沖縄海洋博―皇太子訪沖―三木訪米―天皇訪米などの悪あがきを日・米・朴は試みんとしている。かかる情勢にあつて我々はプロレタリア国際主義を身をもって示し、戦前天皇制の悪業の一つ一つを血償すべく、インドシナ人民に呼応して皇太子訪沖・訪米阻止闘争を徹底して闘い国際帝国主義を追撃していかなければならない。かかる実践によってアジア同胞と堅く結合すると同時に、他方ではアジア三国党の革命路線をしっかりと正しく理解し、評価、支持し、思想的・政治的・理論的に一体化してゆくことが日本プロレタリア人民の緊急な任務となりつつあります。

このような観点にたつと、我々は今や新たな段階に達しつつある中国継続革命の現状とその理論を正しく紹介し、それを正しく評価、支持する作業をよりいっそう精力的に推進してゆかんとするものである。もはやベトナム「和平」、中国の人民外交―十全大会―批林批孔闘争、これらに対する朝鮮労働党の断固たる支持などの動向についてデタラメな解説を並べたて、誹謗中傷する風潮は事実でもって完全に粉砕されてしまった。しかし、今なお反スタロツキズム（及び毛沢東利用主義）故の無認識が日本人民の国際的連帯を阻み、今

後少しでも不利な事態が生じたならば、この偏狭な一国主義の民族排外主義的傾向が頭をもたげてこないとはいえない。実際、歴史的事実をもつて粉砕されているにもかかわらず、このかんの世界革命の著しい前進に完全に立ちおくれた誤った論調がそれに無自覚なまま命脈を保っている。いわく、中国の「社会主義革命論はゴータ綱領批判の歪曲」だとか「修正だ」とか。「社会主義社会には階級、階級矛盾はないしプロレタリア独裁も必要ない。」「ソ連を社会帝国主義と規定し、反帝反社帝戦略を設定するのは極論で、ソ連主要打撃戦略の社会ファシズム論だ」「過渡期世界にあっては一国社会主義は不可能だ」「スターリン主義の延長であり、スターリン批判ができていない」とか。あるいは、これ程の反中国、反毛主義ではないにせよ、この論調に正しく対応できず、スターリン主義を擁護したり、「ゴータ綱領批判」の過渡期のプロ独期と社会主義の段階のプロ独期を区別せず、結局「ゴータ綱領批判」「国家と革命」で展開されている社会主義の段階をプロ独期に解消し、追放してしまうような副次的誤りも生れている。このような誤った論調を完全に一掃してゆく

ために、かつ中国第四期全国人民代表大会以降の最新の毛主席の「中国は社会主義国家に属しており、解放前には資本主義とほぼおなじであった。今でも八級賃金制、労働に応じた分配、貨幣による交換が行なわれている。これらは旧社会とたいして変らない。異っているのは所有制がかわったことである。」

という指摘やブルジョアの権利に対して「これはプロレタリア階級独裁の下でのみ制限することができる」という指摘（北京周报七号）の意義を明らかにするために我々の作業は重大だと考える。又、この作業は最近統々と発表されはじめている「毛沢東政治経済学を語る」「毛沢東プロ文革を語る」「毛沢東外交路線を語る」「毛沢東思想万歳（上・下）」などの毛沢東選集四巻以降五〇―一六―一七〇年代社会主義革命と社会主義建設の時期の毛主席の論文や談話、指示などの一定の解説にもなるであろう。

（なお筆者は上記四冊の内はじめと最後の二冊しか読んでいませんが、いずれにせよ、このような文献を日本労働者、人民が目を通せるようになったことは非常に嬉しいことです。「毛沢東政治経済学を語る」は値段も七八〇円で、工面すればなんとか労働者も手にいれることができますし、六〇年代来のプロ文革、中ソ論争など中国共産党の社会主義継続革命に対する基本的態度を知るのに格好の書と思います）

第一章 社会主義の下での階級闘争存続論、プ

ロレタリア階級独裁の継続革命路線を擁護する

（上）

△1√中国は全人民所有と集団所有の二所有制の社会であ

り、商品経済、階級、階級闘争が存続し、プロレタリア階級独裁が不可欠なことは当然なのだ。

現在の中国社会は全人民所有制と集団所有制の併存する社会であり、部分的には小生産・小経営が存在し、資本家には固定利子が支払われ、旧資産家や地主が自営業を営んだりしている社会である。このような社会はプロレタリア階級独裁の下での全人民所有制の社会主義計画経済が全社会の経済的関係を主導し制約している点、資本主義所有関係が一掃されている点で「ゴータ綱領批判」や「国家と革命」で展開されている共産主義の第一段階たる社会主義の一手手前の社会主義の性格が主要側面である社会といえる。しかし厳密な意味での社会主義とは言えないこと。もちろん社会主義の最高に成熟した世界社会主義ではない。

この社会は、第一は集団所有が人民公社制として、資本制分業を揚棄せんとする志向をもち、その内部の分配制が、生産手段の供出を規準にするものではなく、労働力を基準とする労働時間制をもって構成され、対外的にはしっかり社会主義計画経済の中に包摂されているが、社会と集団の関係は、その生産物を売買する関係であり、生産力の高低によって、各集団構成員の受け取り分は相違する。従って、労働力を基準にした分配制を敷いてあっても、単位労働時間の受け取り分が集団毎に違ったりする。又集団の剰余生産物を市場に放出

れてない資本家・地主・富農が存在し、広範な小生産者（小ブル）層が存在し、集団化されてはいるが、まだプロレタリア化されていない農民階級が存在し、新しい形の資本関係の危険が存在し、階級・階級闘争が日々再生産されているのは確実なことであり、従ってプロレタリア階級独裁が必要なのは明瞭である。実際中国は自からの社会を広い意味で社会主義と規定しているが、かかる実態を「いまでも八級賃金制、労働に応ずる分配、貨幣による交換等がおこなわれている。これらは旧社会とたいしてかわりがない。異なっているのは所有制がかわったことである」「わが国でおこなわれているのは商品制度であり、賃金制度も不平等であり、八級賃金制度が存在しているなどなど。これ等はプロレタリア階級独裁の下で制限を加えるほかはない」（毛沢東、北京周报七五年九号）と科学的分析のもとに率直に認め、かかる現実認識のもとに、共産主義継続革命を遂行せんとしていること。スターリンはかかる二所有制社会に於ける階級、階級矛盾、階級闘争を認めず、無階級社会論を展開し、共産党内に反映した階級闘争を「帝国主義の先との闘争」として外因にすりかえてしまったが故に真にプロレタリア・貧農に依拠して継続革命を遂行できず、逆に資本家勢力に依拠し、ブルジョア独裁と国家資本主義から社会帝国主義への道を拓くことになってしまった。「全ての搾取階級が一掃されて…、社会に敵対する階級はもはやない」（スターリン）「ソヴェエト憲法草

したりする。又「労働に依じて」といっても、純粋に労働時間を反映したものではなくて、労働の強度や複雑労働、熟練労働の労働の質が分配量に反映されている。つまり、二所有制のもとでは集団と社会、集団相互、集団と個人の経済的關係が商品交換の法則から脱け出しきれず、又再生産されてゆく条件がある。

かかる二所有制の特質に加えて、中国では資本家への固定利子の支払いが存続し、資本家や地主・富農達の自営業が存在し、集団化されていない小生産者も存在するし、更に少量の自留地も認められているという特殊な条件がある。従って日々商品交換が繰り返され、貨幣蓄蔵や、債券・債務関係が再生産され、商品と貨幣の物神崇拜の経済的基礎が存続し、小生産者群は生産手段を所有する資本家と、労働力売る以外に生きられないプロレタリアへの分解を不可避化されるわけでブルジョアの社会関係や意識が再生産される経済的基礎がある。

更に問題は、このような商品経済制度を裾野にして、全人民所有制の企業でも、生産手段の管理者層や労働の指揮者や党員が社会の割り当てた以上の剰余を搾取したり、或いは労働の報酬制度を操作し、自らを資本家化し、労働者を賃金労働者化してゆく新しい形の資本主義生産関係が発生する危険を広範にもっていること。

これ等の事態からして、搾取はしていないが、改造されき案）「もはや敵対する階級はなく、…階級的衝突が存在しない」（スターリン、ソ連共産党一八回大会）この毛沢東の道とスターリンの道に関しては後述するにしても、いずれにしてもはつきりさせておかなければならないのは、中国共産党の「社会主義の下での階級、階級闘争存続、プロレタリア独裁の必要性」は、かかる中国社会の現状に即して導かれた路線であり、理論的にも実践的にも全く正しい主張であること。

△2√二所有制の下での共産主義への道と資本主義への道の論理とは何か

このような二所有制の下での、商品経済、階級、階級矛盾をとりのぞくには、商品経済が社会的分業と私的生産を基礎とする生産物交換に経済的基礎をおいている以上、これ等の経済的基礎たる、集団所有制や小経営、資本家への利子供与、賃金制度等の、資本制生産関係の残りかすを取り除き、生産手段を共有化し、個別労働を単一の総労働の直接の一環に組織し、交換を通じた分配をなくすことが第一であり、第二に、商品交換のもっとも奥深い基礎たる精神労働・肉体労働の分業、都市と農村、工業と農業等の資本制諸分業への人間の隷属を断ちきる闘いを強めること。第三にこの為には、プロレタリア独裁を打ち固め不断に革命を繰り広げ、資本主義勢力

を一掃し、上部構造の面での資本主義の思想、道徳、法、文化、社会的諸関係を一掃し、共産主義の上部構造を樹立してゆくこと。第四に、この革命の力でもって、生産力を解放し、上昇させること。第五に、生産物の分配を労働の質によらず労働時間に応じた分配に全国的に一律化させると同時に共産主義無償労働等を組織し、「ブルジョアの平等」（共産主義的不平等）を排し、必要に応じて受けとる分配制度に近づけてゆく。第六に、国際帝国主義と国際的・国内的社会帝国主義の勢力と闘い、プロレタリア世界革命を促進し、その根拠地としての役割を担うこと、等が考えられる。このように、生産関係と上部構造を同時的に変革し、これと一体に生産力を上昇させ、生産を共産主義化し、これと照応させつつ、分配を共産主義化してゆくこと、つまり、生産関係と上部構造の変革を生産力の発展よりも優位に考え、前者の成果のうえに、生産力の発展を想定し、生産に分配が規定されている観点にたつて生産面での共産主義的変革を重視し、その中で、分配の問題を解決してゆくこと、「革命をつかみ、生産を促す」不断革命の路線こそが、社会主義、共産主義への道である。「生産力の主要な要素は革命的階級である」（エンゲルス）とある如く、生産力を解放するには、階級闘争を通じて階級を消滅し、これと一体に資本主義生産関係を一掃すること。生産力の発展はこの発展を阻んでいた生産関係と上部構造を変革すること抜きには保障されず、生産力の発展が自然

△3 V 毛沢東の継続革命の路線を擁護し、かつスターリン・フルシチョフ・ブレジネフ・劉少奇の路線を批判する。

前者の道は、毛沢東主席等中国共産党がとっている道であり、後者の道は、かつてのスターリンがとり、フルシチョフ・ブレジネフが発展させた道であり、劉少奇が追求した道である。中国共産党の社会主義革命路線は、第一に商品経済を廃絶し、資本主義を一掃するには、まず生産関係の変革を第一にやり遂げ、これに照応しない上部構造を変革し、この力でもって、生産力を解放する、「革命をつかみ、生産を促進すること。つまり生産関係や上部構造の変革は、とりもなおさず、資本主義勢力との激しい革命闘争の継続であること」を理解し、継続革命（不断革命、革命発展段階と不断革命の統一）を第一とすること。

第二に、三分業への階級の隷属を重視し、生産手段共有化以前から延安精神にもとづいて、又、マルクス・エンゲルスの教義に立脚し、都市を農村に分散させ、工業と農業を一体化させ、「工業も農業も営むことができる」「全面的に発達した人間」の創生をめざし、工業・農業・商業・教育・軍事を統合し、政治と社会生活を統一した共産主義の単位の萌芽たる人民公社を創出したり、5・7幹部学校を創生したり、「兩参一改三結合」の幹部の労働と階級闘争や生産的実践を結びつけ、諸分業に対して人間の側が「全面的に発達する」

に、階級闘争を通じないで、生産関係や上部構造をひとりでも変革してゆくのではないこと。

かかる商品経済の廃絶、共産主義継続革命の道に対して、社会―集団―個人の相互関係を、商品交換の関係を、貨幣経済の関係をとりしきり、私的所有制と利己主義・自由主義を強め、労働の受け取り分を報酬、賃金に逆転・固定化し、全ての生産物に価格を復活させ、生産に於ける剰余を利潤に逆転させ、生産者を賃金奴隷に逆行させ、全社会の生産と分配を価値法則に立脚してとりしきらんとする商品経済の固定化、資本主義への道が対抗する。この路線の下では、生産力の発展はその生産力を構成する革命的階級の変革ではなく、その墮落の道たる貨幣供与による物質的刺戟が対抗し、資本制諸分業への人間の隷属は一層固定化される。

つまり社会的福祉や効用を無視した資本制の下での利潤率の高いという観点でのみの、農業に対する工業の重視、消費材に対する生産財生産の重視、一國に於ける工業と農業に於ける資本主義分業観の国際的拡大版としての工業国と農業国の格差や分業関係の固定、この極限としてこの二所有制の国家官僚独占資本主義への平和的転化と社会帝国主義への発展の道が準備されてゆくこと。このように真向から対立するプロレタリアとブルジョア階級の路線闘争が、この二所有制社会の中で決定的に争われざるを得ないのである。

ことよって、一生涯一つの職業にしばりつけられたりする奴隷化を突破して、「労働者でもあり、幹部でもあり、何でもやれる」人間の創生をめざしていること。

第三に、分配面における生産者の受け取り分の不平等を、ブルジョアの平等に陥らないように留意しつつ、つまり、生産関係・上部構造の変革、生産力の上昇、分業への隷属の克服等、生産面での共産主義的平等を重視しつつ労働時間に応ずる分配をめざしている。

第四に、「女性の解放の度合いは、その社会の発展の規準である」といわれているが、「天の半分を担う」女性の解放はかなり進んでおり、中国ほど社会の指導権を女性が担っている社会は少ない。

第五に、二所有制を単一の全人民所有への過渡とみるも、集団所有制の廃止を近い将来の問題としてしていること。（ちなみに、ソ連は、一九三〇年からみても四五年間も集団所有制が無為に残されている。）

第六に、これらの社会主義革命・社会主義建設の教訓を締めくくり、社会主義が資本主義に平和的に転化するという社会帝国主義を体系化し、国際的・国内的な社会帝国主義との闘争を通じて共産主義革命を継続する路線を獲得し、反帝反社帝の二正面对峙の世界革命戦略を打出したことを。国際的には、自国を世界革命の根拠地と位置づけていること。

第七に、スターリン主義に対して、公式には擁護する立場

にたっているが「毛沢東政治経済学を語る」や「毛沢東思想万歳」では現在のフルシチョフ・ブレジネフ路線の基礎がスターリンにあったことを大胆に、鋭く指摘している。

以上の観点からしても、毛沢東思想の歴史的意義は、マルクス・エンゲルス・レーニンの路線・理論を過渡期世界で発展させたことにあり、マルクス・レーニンの路線は、スターリンではなくもちろん、トロツキーではさらになく毛沢東であるといえることができる。

スターリン路線は、レーニンの「一国から社会主義を開始しなければならぬ」路線を継承し、農業集団化に着手したが、二所有制をもって階級、階級闘争は消滅したといい、階級闘争消滅論を土台にすることによって、根本的誤りを犯してしまった。その誤りは、「毛沢東政治経済学を語る」の経済学教科書批判でも明瞭だが、「ソ同盟に於ける社会主義建設の経済的諸問題」でも明瞭である。第一は、「生産力の主要な要素は革命的階級である」(エンゲルス)「人民、人民だ人民のみが歴史を創造する原動力である」(毛沢東)の基本的観点を抜きに、階級・階級闘争を抜きにした、生産力と生産関係の矛盾の自己展開のごとき客観主義的法則主義がスターリン路線の基礎にある。第二に、唯生産力主義であり、生産関係や上部構造の変革の要素が、生産力を決定的に逆規定することがとらえきれず、経済決定論であること。共産主義や社会主義を経済の問題に、それも分配の問題に一面

貧農に依拠して社会を変革するのに利用するのではなくて、逆に資本家勢力に立脚し、現状の固定化、資本主義への逆行の為に利用したこと。第六に、ブルジョア民族主義(民族的利己主義)に拜跪して世界革命を圧殺したこと、など。このようなスターリンの誤り、反動化は、その後フルシチョフ、ブレジネフに以下の如く受け継がれた。つまり、第七に、二所有制を、革命後六〇年近くなるにもかかわらず変革せず、固定化し、商品・貨幣経済ははらんし、利潤率・労働の質の賃金制―価値法則等の利用、重化学工業の重視、農業軽視、社会主義国際分業論、ブルジョアの等級、専門大学制、国際・国内民族抑圧、世界革命の完全な裏切りとしてのブルジョア議公による権力の平和的な移行論、などとして完成されていった。劉少奇は、毛沢東の労働者・貧農・下層中農に依拠した「社会主義の下での階級闘争存続―継続革命」の路線に対して、資本主義勢力に依拠し、商品経済―資本主義復活への道を歩み、プロレタリア文化大革命の中で打倒されていった。プロレタリア文化大革命と九全大会の成果を基礎にして、インドシナ革命戦争を始めとする世界革命戦争は、六〇年代後半から七〇年代前半にかけて飛躍的大前進を遂げ、国際帝国主義をして、七一年―七二年にかけて敗退させるにいたった。このことによって、国際帝国主義の基底を占めた第三世界が革命的に大々的に変革され始め、国際帝国主義と社会帝国主義が窮地に陥り始め、かかる事態に対して、ソ連社会帝国主義

化し、生産関係・分業・思想・道徳・法律・文化などの上部構造の変革の問題が全くかえりみられない。分業の隷属を克服する「全面的に発達した人間の創出」の問題などのマルクス・エンゲルスの姿勢は全くないこと。スターリンにあっては、資本主義は無政府性(恐慌)の問題に一面化され、これに生産手段の国有―計画経済が対置されるだけであり、商品経済に基礎をおく、賃金奴隷制からの完全解放が共産主義であることが正しくとらえられていない。第三に、資本主義が商品経済・貨幣経済を基礎にしていること、ここにブルジョア思想の根源があることがとらえきれず、商品経済を資本制搾取関係が取り除かれたことを理由にして固定化し、これを利用することすら提起している。第四に、資本制三分業のマルクス主義的把握がなく、都市を分散させ、都市と農村を接近・統合させ、教育を階級闘争・生産闘争・科学の実験などと結びつけ、「全面的に発達した人間をつくる」観点は全くなく、資本主義の発達論を国家資本主義の下でそのままあてはめた農村の分解と工業都市の建設↓工業生産物の農村への供与と農業生産物のシェーレ状の交換の固定・重化学工業偏重・農業軽視・工業と農業の分業関係の固定化・教育の専門大学化による解決の傾向を實行していること。コルホーズと国家との商品交換の固定、余剰を市販することの是認、労働の質の固定や出来高払い制度の重視、独立統制のもとでの剰余の個別的処理、など。第五に、政治・権力を労働者・

は中国革命と世界革命を圧殺する為に中国包囲に大々的に乗り出してきた。これに対して中国は一時的に妥協しつつ、反帝反社帝の二正面对峙の世界戦略の下で、十全大会―批林批孔運動を成功させ、プロレタリア階級独裁を打ち固め、インドシナ革命戦争の再攻勢の影の推進者の役割を担い始めた。林彪は、形だけは左の格好をしたが、思想的には極右故に、国際的には社帝と密通する日和見主義を犯し、国内的には資本主義の復活を企む劉少奇の道を歩み、自滅せざるを得なかった。現在発せられた毛主席の「プロレタリア階級独裁への新たな指示」は、国際根拠地の再宣言であると同時に、国内的には、より社会主義革命を新たな段階に押し上げる宣言である。我々はこの動向に注目しておくべきである。

第二章 全人民所有制の下で階級闘争は存続するか―中国継続革命路線を擁護する為に(下)

△1√資本主義的搾取関係が取り除かれても、階級は自動的になくなるものではない。

毛主席は「社会主義社会は相当長い歴史的段階である。社会主義というこの歴史的段階にあっては、なお階級・階級矛盾と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義復活の危険性がある」と述べ、十全大会では「……この歴史的段階に於ては

終始、階級・階級矛盾・階級闘争が存在し……、帝国主義と社会帝国主義による転覆と侵略の脅威が存在する」と述べている。これに対して、反スタロツキストや修正主義者達は、全人民所有制の下では階級、階級矛盾、階級闘争は存在しないと文句をつけたり、ソ連社会帝国主義と同じ主張たる全人民国家論や全人民の党を主張したりする。つまり、全人民所有制の下では勿論、二所有制のもとでも、その諸矛盾は、共産主義と資本主義の矛盾、プロレタリアートとブルジョアジエの闘争等、階級性を帯びていることを認めず、超階級的に把えようとしている。或いは反スタロツキズムの一部は、全人民所有制社会への到達を理論・実践上否定したり、「ゴータ綱領批判」の政治的過渡期の狭い意味でのプロ独期と解釈したりして、どうあっても、社会主義の下での階級独裁を承認しようとする。あるいは、中国共産党を支持している人ですら二所有制のもとでは、ともあれ単一の全人民所有制の下では階級は存在しないのでは、と首をひねったりする。いわんや資本主義へ逆行する危険はないのでは、と考えたりする。我々はこれらの意見に対して、中国共産党の見解を支持・擁護しつつ、断固反批判してゆかねばならない。

生産手段が全人民所有化されたとしても、上部構造の思想や道徳、宗教、芸術、科学、その他の文化、法律等諸制度に資本主義の残りが残っておれば、生産手段は完全に共有化されたとは言えない。正に「それ自身の基礎の上に発展し

で「労働に応じた分配」を「必要に応じた分配」に変革してゆかないかぎり、半階級が資本制分業の存続、及び「労働の量に応じた分配」のブルジョアの平等の権利の固定化を通じて生命を吹き返し、商品経済と資本主義を復活させる危険があることを指摘することができる。

△2V人民所有制の下でなお続く、共産主義と資本主義の二つの道の争い。

全人民所有制の社会の特質は、生産手段は全人民所有化されたが完全には共有化されていず、母斑が存在し、分業への隷属が存在し、分配制度は「能力に応じて働き、労働に応じた分配する」ブルジョアの平等共産主義から見た場合の不平等が存在している。又、国際帝国主義が残存している。それ故に共産主義へ前進する為には、母斑を一掃し、階級と階級差異をなくし、分業への隷属を断ち切り、ブルジョアの平等の分配をあらためねばならない。労働者階級は、精神労働と肉体労働の分業、都市と農村、工業と農業の分業への個人の隷属の隷属を断ち切る闘いを、二所有制社会以上に強め、革命の最大の任務に据えねばならない。そして、この分業への隷属の隷属を廃止し、生産力を圧倒的に解放し、「生活の必要に迫られた労働」から「労働が生活の第一の要求」になる為に「都市を分散させ、農村全体に定着させ」、教育水準

たものではなく、反対に資本主義社会から生れてたばかりの社会であり、従って全ゆるる点で経済的・道徳的・精神的に、それがその母胎から出てくるころの旧社会の母斑をまだ付着させている。」（「ゴータ綱領批判」マルクス）のである。階級に対する概念をレーニンによって規定するならば、「階級と呼ばれるのは、歴史的に規定された社会的生産の体制のなかで占めるその地位が、生産手段に対する関係が、社会的労働組合の中での役割が、従って彼らが自由にし得る社会的富の分け前を受けとる方法と分け前の大きさが他と違う人々の大きな集団である。」（「偉大なる創意」レーニン全集二九巻）、の如く、生産関係、社会関係、分配関係の三側面から定められる。とするならば、前述の母斑の問題と考えあわせれば、生産関係は変化したが社会的関係は変化して、上部構造の面で階級が残っていると明瞭に規定できること。しかし、この階級は資本制搾取関係を基礎にして、二所有制の商品経済や集団所有制の経済的基礎を失っている点で、死滅しかかっている階級、なかばの階級（半階級）という特質をもつ。このような階級は、果して、資本主義を復活する生命力をもち、全人民所有制の下での社会主義から資本主義へ逆転する経済的基礎が（外因としての国際帝国主義の干渉、転覆活動を除いて）存在しているのかという問題が提出される。我々はこのような社会でも、上部構造を変革し、資本制分業と労働に於ける私的性格の残りを除去し、他方

を高め「産業教育と仕事の交替によって……全ゆるる人々の能力を発達させ」「同じ人間が農業と工業を営む」「全面的に発達した個人」の創生をめざし、「工業生産全体の科学的基礎を理解し、各人が多数の生産部門全体をはじめから終りまで実地に習得し、全面的に教育された生産者の層を生み出す」（エンゲルス「反デューリング論」）ような自由な自覚した規律を備えた「共産主義的な社会的労働組織」を創出してゆかねばならない。このような生産―分業関係の変革と一体に、生産力を全面的に解放し、発展させ、分配関係に於ける「労働の量に応じた分配」の共産主義からみた場合の不平等を「能力に応じて働き、必要に応じて受けとる」分配制度に永続的に変革してゆかねばならない。

このような生産関係、分業関係、分配関係の変革は、上部構造の面に於ける思想、政治、文化、技術面等での母斑や階級をなくすところの共産主義継続革命、階級闘争の遂行によってのみ可能である。又このような、資本制的分業関係、分配関係、或いは母斑や半階級を外部から支え、資本主義を浸透させている国際帝国主義を打倒、根絶すべく、世界革命に対して根拠地化の役割を担わねばならない。このような共産主義継続革命が放棄され、社会主義が共産主義の第一段階として固定化され、静止的に捉えられた場合、上部構造の母斑と半階級、そして下部構造に於ける資本制分業とブルジョアの平等の権利にもとづく分配は、労働証書制にもとづく分配

を商品交換にかえ、商品経済と資本主義の逆行の道が拓かれてゆかざるを得ない。全人民所有制の社会は生産手段の私的所有が廃止され、全人民所有化されていることにおいて個別労働ははじめから社会の総労働の直接の一環として存在し、諸労働はすべて単一の共同労働へと再編される。これに基づいて社会の全面的発展と福祉に向けて単一の計画が実現される可能性を与えられ、社会的分業と一体の私的生産故に私的生産物が交換を通じて社会的役割を果たす（つまり、生産物が商品化されるような）生産面における主要な経済的基礎は取り除かれる。この結果、継続革命の中で生みだされた全人民所有制社会であってみればなおさら、商品経済—貨幣経済、資本主義の復活する可能性は二所有制社会に較べて格段に少なくなることは明瞭である。交換もなく商品もなければ貨幣も不要になるわけで、人々は「社会から労働証書を受けとり、この証書をもって消費手段の社会的貯蔵庫から同量の労働量に値するだけのものを引きだす」（ゴータ綱領批判）ことによりって分配を処理するようになる。しかし、資本主義所有関係が未形成な段階でも、共同体と共同体の間で生産物の余剰を交換することを通して、更に生産者が自分にとって使用価値でないもの、商品生産を徐々に開始することを通して商品経済が共同体内に反作用したように、資本制搾取関係は取り除かれても工業と農業、都市と農村、精神労働と肉体労働として、独立した分業に基づく生産が未だ存続している社会では

労働の差別、階級差別は広範に残っている。そしてかかる生産関係に照応した個人的差異に基づく「労働に応じた分配」制（つまりは「ブルジョアの平等」が社会の指標になっていること）と上部構造の面での資本主義の母胎とが結びつくとき階級分化が生じ、労働証書制は商品—貨幣制へ変質する危険性がある。そして、貨幣化された労働証書が生産関係をおおいい、反作用的に逆規定していく危険性が生れる。こうなるとは、労働の本来の社会的性格の矛盾と個人的性格の矛盾は社会的性格と私的性格の矛盾に転化し、生産者は労働の成果を賃金として受けとり、生産物は価格制をとり、共産主義的自発性、創造性、献身性に基く結合された労働者の関係は変質し、貨幣化した労働証書の持ち分によって決定される支配と被支配、権能者と隷属者の関係が生れてくるのは必然といわねばならない。かくて生産者は利潤（率）の概念で評価され、労働者は物質的刺激によって操作される奴隷に復帰してしまう。このように、全人民所有制の社会主義の段階は、生産手段が共有財産になっている点で素晴らしいが「共産主義」というこの言葉は、それがまだ完全な共産主義ではないということをお忘れさえないければ、ここで使って差しつかえない。の如く、何か固定された我々の到達目標ではなく、不断に変革され、止揚されなかり、資本主義への変質、逆行の危険性を持った、共産主義の高い段階への過渡的段階である。そうであるが故に「この社会主義の主張するところは、革命

の永続宣言であり、革命の階級的独裁である—すなわち階級差異一般の廃止、階級差異の基礎である生産関係の廃止、これらの生産関係に対応するいっさいの社会関係の廃止、およびこれ等の社会関係から発するいっさいの観念の変革のための、必然的な過渡期としてのプロレタリアートの階級的独裁である。」（マルクス「フランスに於ける内乱」大月ME選集一七P）の如く、共産主義継続革命の路線は不可欠なのです。ましてや、過渡期世界の国際帝国主義が不断に反革命干渉、転覆をおこない、外部の攻撃が内部の矛盾に融合する段階では、とりわけ、継続革命は決定的であることはいまでもないことです。とは言え、何世代にもわたって共産主義革命が持続し、国際帝国主義が打倒され、世界社会主義が樹立されてゆけば、その前進の度合に応じて階級、階級差異は消滅してゆき、徐々に共産主義の高い段階の特質が生れてき、国家の死滅が開始され始めてゆくことが明瞭です。つまり、階級闘争とプロ独を通じて階級と階級闘争をなくし、国家が死滅させられてゆくのです。

〈3〉ソ連「全人民の党」「全人民の国家」を批判する

ソ連社会帝国主義者は、「ソ連ではずっと前から友好的な諸階級—労働者、農民、人民インテリゲンチヤの社会的グループからなり、搾取階級がとうに一掃されている為、ソヴ

ィエト国家はくつがえされた搾取者を抑圧する機関としての性格を失い、いわば全人民の利益と意志を表現している」（スースロフ「ソ連共産党中央委に於ける報告」一九六四年二月十四日）として「全人民の党」「全人民の国家」を展開している。これは二所有制のもとでの労働者、貧農階級と新旧の資本家、地主、富農、資本主義化した党官僚、技術者、学者、文化人、芸術家たちとの階級対立を隠蔽し、資本主義的支配階級の階級的支配を隠蔽するものであり、スターリンの「二所有制のもとでの階級対立の消失」の延長線上にあるのです。又、全人民所有制の下での分業への隷属、ブルジョアの権利の階級、階級矛盾、階級闘争の存続を否定し、これを超階級的矛盾といくるめ、プロレタリア階級独裁を否定するものであり、ブルジョア独裁と資本主義への道を隠蔽する主張である。党があり、国家がある以上、階級対立があるはずであって、実際、現在のソ連社会は形式的には二所有制の社会であり—実際は社会帝国主義だが—一時的局面的な搾取関係すらみられ、商品交換、賃金、価格、利潤の関係が存在しているわけであり、国家官僚独占資本主義の社会である。

第三章 毛沢東思想はマルクス・レーニン主義

の過渡期世界における継承・発展である。これをスターリン主義と同一視して批判・否定する手口を断固批判する。

毛沢東思想はマルクス・レーニン主義の過渡期世界に於ける繼承発展者であり、マルクス・レーニン主義を繼承発展させられず、「反動化させたスターリンとは根本的に相異する。このマルクス・レーニン・毛沢東、スターリンの歴史的關係を捉えきれず、毛沢東が一応公式にはスターリンを擁護する立場をとっているのを利用し、スターリン主義と同一視し、否定する反スタトロツキズムの反毛主義の手法を断固批判しなければならぬ。又、副次的に、反スタトロツキズムから毛沢東を防衛することに於て、毛沢東とスターリンの区別が出来ず、スターリンを擁護することによって毛沢東を擁護せんとする毛教条主義者を批判し、我々との区別をはっきりさせなければならぬ。

反スタトロツキズムの批判者は、毛沢東の過渡期世界に於ける社会主義革命、社会主義建設の路線をスターリンの「一国社会主義」論と同一視し批判するのであるが、国内継続革命の路線に關しては、その正しさが明瞭であるが故に、実践的にはケチつけをすることが出来ず、「ゴータ綱領批判の修正」とかのレッテルをはるにとどまっている。かかる状態であるが故に、批判の決め手を中国の国際路線にもってきて、「世界革命の放棄」「総和革命」「世界同時革命の放棄」とかケチつけをして、あたかも一国からの社会主義建設・社会主義革命がプロレタリア世界革命の遂行と背反するかの如き論調を展開し、又国際的・国内的反帝反社帝世界革命戦略の

の側にたっていることを指摘し、第四に、以上の第一章、第二章を踏えて、毛沢東思想を反帝反社帝の継続革命路線として総括しつつその世界史的位置とその中での若干の問題点を提起し、合わせて、我々の立場や反スタトロツキスト、毛教条主義の位置関係を明瞭にしていくことにする。

△1V 中国はプロレタリア世界革命の根拠地をめざしている。

「世界資本主義の路線が地球の一角ですすでに崩壊し、その他の個所ですでにその腐朽性をすっかりさらけ出している時代、これ等のまだ残っている資本主義の部分がますます植民地・半植民地にたよらなければ存続できなくなっている時代、社会主義国家がすでに樹ちたてられ、しかも、すべての植民地・半植民地の解放運動の為に闘う用意があると表明している時代、資本主義国のプロレタリア階級が日一日と社会主義の社会民主主義政党的影響から解放され、植民地・半植民地の解放を支持することを表明している時代、このような革命的植民地・半植民地は、もはや世界資本主義の反革命戦線の同盟軍とはみなすことは出来ず、世界社会主義の革命戦線の同盟軍に変わっている」(毛沢東・新民主主義論)。「レーニン主義の観点に従えば、一つの社会主義の最終的勝利は自国のプロレタリア階級と広汎な人民大衆の努力が必要であるばかりでなく、世界革命の勝利にかかっており、人が

世界史的意義がわからず、かつソ連の資本主義・社会帝国主義の性格を見抜けず、「ソ連主要打撃戦略の社会ファシズム論」と強弁し、ソ連社会帝国主義を免罪していつている。そしてこれ等の主張のうえに、毛沢東をスターリン主義の単なる左派の位置において扱おうとする。ひどいトロツキストになると、トロツキズムの立場からレーニンを否定し、レーニンの一国社会主義着手、建設可能論までも否定し、レーニン「スターリン」毛沢東として、三人を串刺し的に否定し、トロツキズムをロシア革命全体の歴史の中で最高の路線として賛美するような態度をとったりする。

従って我々は、かかる反スタトロツキズムに対して、第一に、中国の国際路線を検討し、これがプロレタリア世界革命を成就する為に定められ、プロレタリア国際主義で貫かれていられることを実証し、事実でもって反批判し、第二に、一国からの社会主義の建設が、理論的にもマルクス・レーニン主義の路線であり、世界革命を促進するものであり、これに敵対するものでないことを明らかにし、レーニンもこの道をめざし、毛沢東もこれを受け継いでいることを論証し、この発展として国際的・国内的反帝反社帝継続革命路線があることを明らかにし、第三に、毛路線を「一国社会主義路線」とか、「ゴータ綱領批判の修正」とかいつて批判するのは、実は、反スタトロツキズムが国際的・国内的反帝反社帝継続革命路線を否定し、国際国内の社会帝国主義を擁護して、ソ連社帝

人を搾取る制度が全地球から消滅されて、全人類が解放されることにかかっている」(中国共産党第九回全国代表大会)「国家は独立を求め、民族は解放を求め、人民は革命を求めている」「人民、ただ人民のみが、世界の歴史を創造する原動力である」「『帝国主義の重要な特徴はいくつかの大国が覇権を獲得しようとする努力していることである』と述べている。こんにちでは主として米ソ両核超大国が覇権を争っている。彼等は毎日軍縮を唱えているが、実は毎日軍備を拡張している。彼等は争奪もすれば結託もする。…結託は相対的で一時的である」「米帝国主義は朝鮮侵略戦争に失敗した時から下り坂をたどり始めた」「ソ連修正主義集団は、…社会帝国主義に変質させてしまった」「新しい世界大戦の危険は依然として存在しており、各国人民はかならず備えがなければならぬ。だが当面の主要な傾向は革命である」「各国人民が方向をはっきり見究め、警戒心をたかめ、団結を強化し、闘争を堅持すれば、戦争を食い止める可能性はある。もし帝国主義が強引に戦争を起すならば、必ず全世界の範囲でより大きな革命を引き起し、その滅亡を早めるだろう」「国際的には、わが党はプロレタリア国際主義を堅持し、党の一貫した政策を堅持し、全世界のプロレタリア階級・被抑圧人民・被抑圧民族との団結を強め、帝国主義の侵略・転覆・干渉・支配・侮辱をうけている全ての国との団結を強め、もっとも広汎な統一戦線を結成して、帝国主義と新旧植民地主義、と

りわけ米ソ両超大国の覇権主義に反対しなければならない。我々は、全世界の全てのマルクス・レーニン主義の政党、組織と団結して、現代修正主義に反対する闘争を最後まで、おしすすめなければならぬ。「戦争に備え、自然災害に備え、人民のために」「深く地下道を掘り、いたるところで食糧を貯え、覇権を求めない」(以上、十全大会報告議案集)。「わが中国はたんに世界革命の政治的中心であるばかりでなく、軍事上でも、技術上でも世界革命の中心となり、彼等に武器を、すなわち中国製の文字の刻み込まれた中国の武器を与えねばならない。公然と支持しなければならず、世界革命の兵器工場とならなければならない」(毛沢東・談話・一九六七・七・七)

以上でもって中国が世界革命に対して如何なる態度をとっているかは、一目瞭然であり、「一国社会主義建設だからプロレタリア世界革命、全世界プロレタリア・人民の利益を第一に据えていない」という批判は全くの誹謗であることは明瞭です。

△2▽社会主義建設の継続革命は世界革命に助けられてのみ前進し、又その前進は世界革命を促進させる。社会主義建設と世界革命を対立的に把えるのはスターリンと毛沢東の道の混同である。レーニン・毛沢東の道とスターリンの道の根本的相異を見究めよう。

に依拠した反帝反社帝の継続革命であり、他面では反帝反社帝の世界革命の根拠地化の闘いである、という継続革命の内実を理解していない人の見解です。

過渡期社会のプロ独の段階であろうと、社会主義のプロレタリア階級独裁の段階であろうと、プロレタリア国家の発展段階の如何によらず、自国革命と世界革命、三プロックの有機的一性、相互制約関係は、世界革命戦争が継続している限り永久不変に貫徹しているし、社会主義社会が存立し、発展してゆく為には国際的・国内的プロ人民の革命闘争に敵対し得ないのです。プロレタリア独裁社会であろうと、これを世界プロレタリア独裁の限定として、根拠地化の闘いを推進しないならば、粉砕されるか変質してしまうのであって、「プロレタリア独裁」と名称上強調するか、「社会主義」と名称上強調するかの問題ではなくて、その内実が世界革命の根拠地化を果し、国際プロレタリア人民・被抑圧民族の闘いを支持・支援し、国内的にはプロレタリア・貧農に立脚し、資本主義勢力を独裁しているか否かに於て、「総和革命か、否か」「世界同時革命か、否か」は判定されねばなりません。一国からの社会主義建設の主張も、レーニンや毛沢東のそれとスターリンのそれではこれまでみてきたように、一八〇度の根本的相異があり、前者はマルクス主義の道の発展であり、後者は反帝反社帝継続革命の裏切りと国家資本主義への逆行・打固めの道です。スターリンの道は、「一国社

以上みてきたように、中国共産党は、一貫して、社会主義世界革命を完遂すべく、全力をあげていることは明瞭だ。世界革命の推進、全世界のプロレタリア・人民・被抑圧民族の闘いを支持・支援すること、一国から社会主義を建設してゆくことは、決して矛盾しない。その反対に、一国からの社会主義建設は全世界のプロ人民・被抑圧民族の革命闘争に支持・支援され、国際帝国主義と社会帝国主義の包囲と対抗しつつか建設され得ない。又、プロレタリア世界革命は、労働者国家の共産主義継続闘争が前進し、プロレタリア階級独裁と社会主義が強化され、打固めてゆくのに応じてそれだけ前進する関係にある。このような関係に社会主義建設と世界革命があるが故に、一国での社会主義革命・社会主義建設は世界革命と切り離せず、その根拠地になることによってのみ前進してゆくことが出来る。

プロレタリア独裁を遂行している過渡期社会の場合は、必然的に根拠地化の役割りを果さざるを得ないが、社会主義社会になったならば矛盾もなくなり、プロ独も必要なくなるが故に、世界革命から切り離されて、国際人民の支持・支援も受けずとも、一国だけでも社会主義が建設されるから、世界革命を見捨て民族利己主義になったり、その「社会主義」が変質したりしてしまうので「総和革命になる」とか、「世界同時革命を放棄したことになる」とかいった主張が見受けられるが、これは、社会主義建設の内実がプロレタリア・貧農

会主義可能論」の名のもとに、一国国家資本主義の反動性をおしくしたところがあり、一国国家資本主義を推進するには、当然にも国際プロレタリア人民の革命闘争と世界革命を抑圧し、国際帝国主義に屈服し、国内的にはプロレタリア・人民を抑圧し、資本家勢力に屈服しなければならない。

生産手段の所有関係を機軸にして、当該の社会の特質を設定するのが、史的唯物論の原則である以上、過渡期世界の一定の段階で、正しい路線に導かれた場合、資本制搾取関係も部分的には許容したプロ独社会↓プロ独の二所有制社会↓全人民所有制の社会に昇まってゆくことは、理論上、当然想定されることだし、どんな人も理論上、これを否定しはしないでしょう。現にレーニンも「……ただ協同組合だけによって、完全な社会主義社会を建設するのに必要な、すべてのものではないだろうか？ これは、まだ社会主義社会を建設したことはない。しかし、これこそ、この建設に必要で十分なすべてのものである」(「協同組合について」レーニン全集三三巻、四八八頁)と述べ、更に「ヨーロッパ合衆国のスローガン」(レーニン全集二一巻)でも「一国ないし数ヶ国からの社会主義建設の可能性」を述べている点でも、一国からの社会主義建設の着手を主張しているわけで、このレーニンの文言をスターリン主義者が悪用しているからといって、レーニンの主張の正しさを否定してはならない。何故に、これ等の人々は、必死で反対するかといえ、その人々が、ト

ロッキズムの小ブル性と通底していることにあり、同時に、他面では、毛沢東思想とスターリン主義とを区別出来ず、同一物と捉えているところに根本問題がある。毛沢東思想に、余りにも無知で中国社会主義革命路線を偏見をもって見ていることにあります。スターリンは、最初、マルクス・レーニンの社会主義建設の方向を継承しようと努力したが、非マルクス主義の小ブル社会主義故に多くの根本的誤りを犯し、対外的には、一九二〇年後半から三〇年代前半の世界革命の波に対応する資本主義工業国の前段階決戦の闘いや、農業植民国の民族解放・社会主義の闘いを指導し切れず、これを挫折させるか、敵対し、又、自国の社会主義革命に於ては集団化を開始したものの「無階級社会論―階級闘争消失論」を展開し、反帝反社帝継続革命の路線を樹立出来ず、その反対の社会帝国主義の道に転落していった。世界革命・三プロック革命の敗北の上に、コミンテルン第七回大会の「反ファシズム統一戦線―人民戦線―粛清」の社会帝国主義の路線が築かれていった。

毛沢東の路線は、中国革命の革命的遂行の過程で、この極端となった社会帝国主義と半ば無自覚的に闘争しつつ反帝反社帝の新民民主主義革命を遂行し、社会主義建設―中ソ論争の中で、又、走資実権派との闘いの中でこの社帝との闘いを自覚的・意識的なものに昇めていったこと。そして遂に、反帝反社帝の二正面同時打倒の世界革命路線を打出し、コミンテ

進したりするかは、ただ階級とその党と指導者の諸要素が決定するのであり、この過程は人類の中の二大階級たる資本家とプロレタリアートの英知をかけた叙事詩ともいえる壮大な闘争の絵巻なのである。帝国主義、植民地国、労働者国家の階級闘争を活発化させ国際要因と国内要因は一体化し相互に相乗的に促進し合う、このことは二大階級の闘争に対して次のような特質を与える。

樹立されたプロレタリアート独裁権力は、当該プロレタリア国家の階級闘争に影響を与えると同時に、資本主義国の階級闘争に決定的影響力（規制的な）を与える。例えば先進国の社会主義革命と労働運動の前進、農業、植民地国の民族解放闘争の革命化等に。だから、帝国主義は個別の利害を越えて国際的、国内的に団結して反革命体制を築いたり相当程度資本主義の運動法則を外から規制したりして、国際的、国内的的管理通貨制をテコとする国家独占資本主義を創り出し帝国主義を変形せんとしたりする。このような形でこの帝国主義の延命は逆にこの延命の構造を通じてプロレタリアートを世界プロレタリアートに高め国際、国内的に階級形成を促進するし、被抑圧民族や人民との団結を促進する。と同時に帝国主義の延命と共同の反革命はプロレタリア独裁権力の国家やその党に決定的な規制力を生み出す。この規制力は、国内の資本家勢力と融合しプロレタリア独裁権力とプロレタリア党を内部から変質させ修正主義―社会帝国主義やマルクス主義の

ルン第七回大会の社会帝国主義への転落の総路線を体系的に打破る主体の側の三〇年代危機を突破した地平を切り拓きつつあること。

これは、レーニンがやり遂げきれずに、逝去した過渡期世界の革命路線を半ば樹立する偉大な功績であり、国際共産主義運動の発展をマルクス・レーニン―毛沢東の脈絡で捉えることを我々にためらわせないのです。

△3V我々の反帝反社帝二正面世界同時革命戦略の根本的意義と毛沢東思想

ロシア革命は、資本主義から共産主義への世界的規模での移行の世界的過渡期をきり拓いた。この時代は、ブルジョアジーとプロレタリアートの、一時代をかけた食うか食われるかの、反革命と革命の世界革命戦争の時代です。この革命情勢では経済過程の下部構造に対して、上部構造の階級闘争、イデオロギーが強烈に反作用し階級闘争の如何によって下部構造が資本主義的にか共産主義的にか改造される時代であり、人々は生産関係に規定されつつも階級闘争の力を通じて自らに好ましい生産関係を選択する機会を与えられる。史的唯物論の法則は、ついには世界社会主義を樹立する歴史的必然性を明らかにしてくれる。しかしそれがどのような道筋を通り、どんな後退や前進、横道にそれたり停滞したり、急に一大前

名をかぶって生れてくる。或いは、資本主義国内のプロレタリア党を社会帝国主義の権力に支えられつつ社会帝国主義に変質させてしまふ。つまり帝国主義と共産主義は激烈に闘争し合うことによってその闘争の諸条件の中で、相互に食い合ひ相互に転化し合う。それ故に、プロレタリア階級は外部のブルジョア階級と闘うと同時に、味方陣営内部に不断に発生する権力を持ったり権力に近づいている反革命の修正主義の社会帝国主義を正面の敵と捉えきり、帝国主義と社会帝国主義の二正面の二つの敵を設定しなければならない。つまりプロレタリアートは、帝国主義打倒の戦略―戦術と同時に、共産主義を樹立する戦略―戦術をもち、これを統一した戦略を持たねばならないのである。

第二は、この反帝反社帝の二正面革命は、相互転化の条件がなくなる国際帝国主義と社会帝国主義が最後の一扫され、根絶される世界社会主義の段階まで持続し、世界革命戦争に勝利し、武装解除されたが侵略を企む帝国主義と社会帝国主義を打倒しつつ、資本制生産関係、三分業、諸母斑を一扫し国際的規模での資本主義の国際分業を一扫すべく、又、世界社会主義に向けて各国・各プロックの革命の不均等性を調整する世界プロレタリア独裁の段階を不可欠とする。この段階で、各国・各プロック革命は世界党！世界赤軍―世界管理機構によって生産手都の世界管理と世界計画経済が実行され、徐々に各国・各プロックは単一化されてゆく。最初は、世界

党—世界赤軍—世界プロ独政府が樹立されても連邦的性格をもたざるを得ない。

第三は、三ブロック、各国階級闘争は相互に独自性をもつと同時に制約し合い、有機的な単一性の中にあり、しかも相互に転化し合っていること。このような内容の認識の下で各国、各ブロックのプロレタリア党(軍)は、各国、各ブロックの革命にまず責任をおうと同時に、世界党(世界赤軍)として相互に連携し合い結びつきを深め合い将来の単一化の条件をつくっていかねばならない。毛沢東等中国共産党の路線は、このような過渡期世界の革命路線に根本的に一致し極めて接近しているのです。

△4V六〇年代新左翼のスターリン批判の問題点とは何か

我々ブント系革命派は三ブロック世界同時革命戦略の立場にたち、資本主義工業国の社会主義革命と農業植民地国の民族解放・社会主義革命とプロレタリア国家の共産主義継続革命のその独自性と同時に有機的相互制約関係と不可分一体性を主張してきた。この主張は今でも正しいし、一国での社会主義革命、社会主義建設を主張したと全く矛盾しない。しかし不十分で誤りですらあったといえる。問題は、反帝反スターリン主義戦略に対抗する余り、スターリン主義の根本問題と社会主義から資本主義への革命的転化の問題としてつ

き出し、権力を握ったプロレタリア党内での二つの道の闘争や権力を握った社会帝国主義のプロレタリア世界革命への決定的制約力を正しく理論的・政治的・思想的に位置付けられず、社会帝国主義の問題(スターリン主義の問題)を「国際帝国主義の下での一国社会主義の不可能性」と捉え、帝国主義の規定性のみを強調し、社会帝国主義の規定性を語らず、
「一国社会主義不可能論」に妥協し革命の対象を帝国主義打倒に一面化して、反帝一元の世界革命路線を採っていたことである。ここにこそブント系左翼の根本的弱点があったのです。つまり、スターリン主義の問題を帝国主義の存在(帝国主義のプロレタリア社会主義革命の敗北)の問題として捉え、その克服の方向を帝国主義打倒として止揚的に捉えた点で秀れていたのだが、他面では労働者国家外の階級闘争の問題にのみ一面化し、労働者国家内の階級闘争・継続革命・社会主義建設の戦略の問題としなかった点でスターリン主義に社会帝国主義を内在的に捉えきれなかったことである。

革共同系反帝反スタ派はどうか。彼等は、部分的には経済主義的に社会主義建設に社会主義経済論の範囲に問題を求めようとした面があるが、権力をとったプロレタリア党の変質、ブルジョア独裁への変質、社会主義の資本主義への反動的転化を解明し、これに対する反帝反社帝の国際・国内一体の二正面同時革命戦略を打出せず、トロツキーを教条化してこれに依拠することでスターリン主義を否定し、帝国主義に利用

される側面をもっていた。スターリン主義を清算し、レーニンやスターリンが遭遇した地平を止揚する方向をもたず(この点、ブント系の止揚姿勢に背馳して)スターリンの裏切り

とその清算を強調することを党派性にして、毛沢東思想やレーニンまで清算し、今やマルクス、エンゲルスまで否定するに至っていること。彼等は、過渡期世界の反帝反社帝の二正面同時革命の革命路線の問題として捉えきれずスターリンの問題を過渡期世界に於ける現代革命の問題として唯物弁証法的に捉えきれず、レーニンやマルクス・エンゲルスのせいに

してマルクス主義を清算・修正していったのです。

毛沢東や中国共産党が一国社会主義建設をめざしていることをもって、何とこれをもって世界革命の放棄だとか、或いは、これを擁護・支持せんとする我々に対して「世界同時革命」を放棄し「総和革命論」に転換したとか批判する人々は、スターリン主義の「一国社会主義」建設路線が実は世界革命に敵対し、これを抑圧することで帝国主義と妥協し、一国国家資本主義(社会帝国主義)を志向したこと、これとレーニンや毛沢東や我々がめざしている反帝反社帝の二正面同時革命戦略が一八〇度相異していることを理解してないことに根拠をもっている。レーニン、毛沢東とスターリンの根本的相異を見極めきれない限り必ず、毛沢東は勿論レーニンを否定しマルクス・エンゲルスを否定し最後には反革命に転落し、帝国主義の側にたってしまうのは必然です。

我々が中国共産党に問題を感じる主要な点をこの章の最後に提起しておこう。

一に、世界革命戦略に於て、中間地帯の資本主義工業国の革命路線をプロ独・社会主義革命路線ではなく民族民主主義革命—人民民主主義革命に設定している点。更に、先進資本主義国の革命に対して前段階決戦のプロレタリア革命戦争の路線を確定しきれないでいること。二は、スターリン主義批判が不徹底で、とりわけ二〇年代末から三〇年代のコミンテルンの総括がないこと。三は、共産主義が世界共産主義としてしか成立しえない問題が明確に提出しきれないこと。また「ゴータ綱領批判」の「過渡期」の解釈を—内容的には正しいし、強引に解釈しきれないことはないが—高い段階の共産主義にまで強引に読解するのは無理なように思える。むしろ新しく、マルクス・レーニンの社会主義の規定の曖昧性を現段階で再整理することとして、大胆に社会主義の下での階級闘争の存続を主張する方がいいように思えること、等です。

第四章 さらぎ派のエセ社会主義論を批判す

これまでの展開で毛沢東の社会主義論と、これに対する我々の理論的立場はほぼ明瞭に打ち出せたと思う。この上になつて、蜂起六二号に掲載された仏エセ社会主義論のペテンを暴いていくことにします。

仏氏のエセ社会主義論のもっとも基本的な特質は、第一に、権力奪取後のプロレタリア国家の発展の諸段階を抜きにしてスターリン論文を論じたり、毛沢東理論を論じたり、あるいはプロ革派の主張を論じたりしていること。例えばスターリン批判について、全人民所有制の社会主義の基本特質を二所有制のソ連社会にあてはめて批判しているが、スターリンでも全人民所有制と二所有制の区別をしつつ社会主義の規定も留保をつけているわけで、こんな批判は的はずれもないところである。スターリンの誤り・反動性は前述したように、「階級闘争消失論」を主張し、資本主義の経済的諸範疇を固定化し、これを擁護したところにある。

少くとも、権力奪取後の未だ資本関係も残存するプロ独社会の多所有制社会、資本関係は掃蕩されたが全人民所有制と集団所有制が併存するプロ独社会、全人民所有のプロ独の社会主義社会、世界プロ独の下での単一化に向かってはいるプロ独の社会主義社会、階級とプロ独・国家が死滅を開始している世界社会主義社会、階級のない共産主義社会、等々の諸発展段階の、どの段階での議論なのかをはっきりさせるべき。我々は二所有制の社会と全人民所有制の社会を区別した上で、社会主義や社会主義下階級闘争存続可能論を主張している。

第二は、このことと関連して、権力奪取から世界共産主義にいたる段階的・連続的発展の諸特質や継続革命の実践的な路線を打ち出さず、社会主義の可能的過程と現実的過程

を混同し、社会主義社会「階級があつてはならない」社会と規定して世界社会主義だけを規定し、それ以前の社会については、世界プロ独以前の過渡期世界での全人民所有制の社会や二所有制・多所有制社会、等々の区別がなされずにいること。世界革命戦争期での全人民所有制の成立を承認しているが、一方ではこの全人民所有制の下でもプロ独が必要であるといっているが、これは対外的なプロ独であつて対内的にはプロ独は不必要になつたとしていいのか、対内的にも階級が存在しプロ独が必要だといっているのかははっきりしない。後者であれば全人民所有制の社会の特質・実態認識は一致し、あとはこれを社会主義というか否かの問題だけが残る。更にこれは新しい事態だが、全人民所有制の下での階級闘争やプロ独を認めることによって、仏氏は対馬忠行氏の意見を投げ捨て、今度は階級闘争一本ヤリになり、全人民所有制の下での労働証書の追求を投げ捨ててしまふ混乱を演じている。

第三は、社会主義の規定を分配面に一面化して、社会主義を生産関係と上部構造の変革から捉えようとする視点がないこと。分配は一つの指標だが、あくまで生産関係に規定されているわけで、生産関係や分配関係の変革は上部構造の変革（主要に階級闘争）と不可分一体であることがわかっていない。いずれにせよ社会の性質の基本規定は生産手段の所有関係、つまり生産関係を第一基準とすべきことがわかっていないが故に、仏氏は社会主義に於ける諸問題が解明・整理でき

ず大混乱している。

第四は、しっかりとした社会主義への移行理論がなく、また社会主義の下での革命の継続の路線がないことを隠蔽し、読者を愚ろうしてやたらとマルクスやスターリンや毛沢東を前後の関連抜きに引用して混乱させている。価値法則の問題に関しては、スターリンを否定する余りエンゲルスを否定してマルクスと対立させる反スタ・マルクス主義のおなじみの手法をやっていることなど、資本主義から社会主義への移行期に於ける商品・貨幣・価値・価格・労賃・利潤・その他の資本主義の経済範疇の問題について混乱があること、等です。

我々はスターリンを、中国共産党の如く実質上はスターリン批判を深めながら公式には「多くの誤まりを犯したが主要側面は偉大なマルクス主義者」とする規定には反対であり、レーニン死後、スターリン主義は三〇年代に完成・開花し、小ブル社会主義から社会帝国主義にコミンテルン七回大会を頂点に転落したと考える。つまり、第二次帝国主義戦争をファシズム対反ファシズムの戦争と捉え、帝国主義への国際的・国内的屈服を反ファシズム統一戦線―人民戦線として完成化して世界革命を裏切ったのであり、三〇年代の中国共産党の抗日統一戦線はこのスターリン戦略の枠内にあり、その中で成長していった関係にありながらも、なお毛沢東はスターリン路線の体現者である王明などの「左」右の日和見主義と闘って指導権を獲得した点で、また現在の中国共産党の路線

が帝国主義と社会帝国主義を同時に打倒する二正面世界革命戦略を採用している点で、スターリンを公式には擁護しながらも実質的には完全にこれを批判して越えている（この内容は「毛沢東思想万才」（上）に明瞭）と考える。従って、革左（神）派やスターリン批判なき日本労働党の如き毛沢東教条主義の典型には全くつきあいかねるし、基本観点は同じだが、マル青同の諸君の如く一応スターリン批判を格好だけはやりつつも中国社会主義論の評価に関して、全く「フルシチヨフのエセ社会主義の教訓」（国際共産主義運動の総路線についての論戦）をマルクス主義の見地から再構成するのではなくて、これをう飲みにして、しかも粗雑極まる歪曲をして、社会主義への過渡期の段階と社会主義の段階の差異を区別せず、社会主義の段階をマルクス主義から追放してしまふ観点とも異なっている。また高原君などは世界社会主義の段階すら存在せず世界プロ独社会があるだけだと言ひ張っているわけで、プロ独社会↓高い段階の世界共産主義という例によって極端な図式を展開している。

△1▽マルクス・エンゲルスの価値法則を否定し、価値法則の存在を資本制社会に限定する誤まり―再び宇野経済学への立脚を暴露する。

仏氏は、「スターリン」商品社会―価値法則、産業資本主

義—剰余価値法則、帝国主義—最大利潤の法則』の批判あり—この特徴付けは基本的に正しいのだが—スターリンはこれでもって社会主義の価値法則を規定的存在と捉え、ニセ社会主義を正当化しようとした」という我々の論文の一言説を捉え、我々が「スターリンの価値法則に屈服した」としてゐるわけだが、これは文章の歪曲であると同時に、決定的なことは、スターリン批判に急な余り、字野の論理に立脚してマルクス・エンゲルスの価値法則を否定し価値法則の作用を資本制社会に限定してしまつてゐる。

これは、労働が商品化し生産過程までが商品化し尽した社会では、価値法則が全生産関係に規定力を発揮することと、商品経済が他の経済社会に寄生的に存在し、作用はしているがその社会の生産関係やこれに基く経済法則を規制することは出来ないこととの、この差異をもって価値法則（の規定力）は資本制社会でしか存在しないと混同してゐることである。価値法則は一般には商品経済の法則として

(イ) 商品の価値は、その商品の生産に要した社会的に必要な労働時間によって決定されること。

(ロ) したがって商品の交換は、無政策的交換を通じて、その平均として等価交換を貫徹していくこと。

(ハ) 労働と労働手段が競争を通じて、無意識的な見えざる手を通して各生産部門に自然発生的に調整され、分配されていく、等の諸点を特徴としてゐる。

視することになるのではないか。社会的分業を社会的生産の下で生産物の交換は商品経済と価値法則を發展させていくのは、マルクス主義経済学のイロハではないか！

エンゲルスがいつてゐるように、「単純な商品生産の全期間にわたり価値法則は…一般的に該当する…」のが正しいマルクスの見解であり、この見解をスターリンが、一応資本制搾取関係が取り除かれた二所有制の社会でも商品経済があり、価値法則は作用してゐる、といったのであり、この限りでは何ら問題とならない。問題は、スターリンはこの二所有制社会での商品経済・価値法則の存在に際して、この商品経済の法則を消滅させるべく、プロレタリア独裁と階級闘争を通じて私的小生産や集団経済を消滅させ全人民所有制に向けて社会改造を推進し、価値法則にうちかつ社会主義の計画経済を強化していくのではなくて、二所有制社会を社会主義を規定し、階級・階級闘争消失論を展開し、資本主義勢力に依拠してプロ・貧農を抑圧しつつ、他方では商品経済・価値法則を固定化していったこと、このことを決定的に問題があるのです。

二所有制社会は、第一章でも述べたように、全人民所有の社会主義経済が集団所有経済や小生産経済と闘争し、前者のプロ独・階級闘争と一体の計画経済の法則が、後者の商品経済の価値法則と闘争してゐる社会です。前者がプロ独権力と結びつき、これを政治的基礎にして後者を圧倒してゐる点で

これ等の法則は、労働力が商品化し、生産過程で商品化されてゐることによって全社会的経済的諸関係が商品化してゐる資本制社会では、他の歴史的諸段階の社会に寄生する商品経済とは違って全面的に作用し、決定的規制力をもつものと考えられる。したがってマルクス・エンゲルスが述べるが如く、価値法則は自由に發展し、完成されるのです。

この点からして字野経済学徒・仏氏は、字野式価値法則に立脚してスターリンを批判するあまり、「エンゲルスとマルクスの相異」なる手口を持ち出してエンゲルスを否定してしまつたことは明瞭です。仏氏の価値法則に関する引用でも、マルクスは「資本制生産の基礎のうえではじめて自由に發展する」とか「価値による総生産の規制が生ずる」と述べてゐるように、資本制社会が決定的な唯一の規制力になることを強調してゐるが、それ以前の商品経済社会に存在してゐないなんてどこにも述べてない。もしマルクスが価値や価値法則を資本制社会のみの法則にとらえるならば、資本論第一章・価値形態論の中で単純な個別的・偶然的な価値形態としてある二人の商品所持者の偶然的な交換から始まり、徐々に価値量が商品交換の割合を規定するようになる全体的、又は展開された価値形態を論じ、更に、この更なる發展として一般的等価形態を論じ、最後に労働の同等性が獲得される貨幣社会を論じてゐたように、資本論冒頭の商品は資本制社会の商品でありながら、なぜこの歴史性を総括したかをいっさい無

社会主義が優勢を占めてゐるわけですが、資本主義・商品経済の諸経済の範疇たる価値・価値関係・価格・利潤・賃金等は死滅せず、プロレタリア独裁権力の路線と階級闘争の如何によつては、常に復活する可能性をもつた範疇であること。しかし価値法則は全社会的な決定的規定力をもつていないが故に擬制化してゐるのです。

このような資本主義の範疇たる利潤や賃金を除いた商品経済の歴史的範疇は、資本制以前の封建制社会、奴隸制社会でも存在し、その社会の経済法則と競合してゐるのです。字野は、社会主義社会に価値法則はない、として二所有制社会を強引に社会主義に規定するスターリンを正当に批判したが、社会主義経済と商品経済の競合がどの様に前者によつて止揚され、後者が消滅されていくかを明らかにしたわけではなく、単純商品経済社会には価値法則は存在しないという論理を構築し、マルクス・エンゲルスの主張を逆に修正してゐるのだ。我が仏氏は、字野弘蔵の教えに忠実に従つて修正主義を鼓吹してゐるのです。

△2√我々の批判にあつて混乱し、全人民所有制のもとでの労働証書制の適用を否定し、又社会主義を分配量の問題に一面化するブルジョア意識丸出しのエセ社会主義論を批判する。

「従って、我々は過渡期世界の『労働者国家』に労働証書制をアテハメて批判する対馬的方法は用いない。……この

『労働者国家』の党と人民は世界プロ独樹立に向けて、世界革命戦争の利害に国内建設の利害を従属させつつ、党の正規軍と民兵の全人民武装と全人民的所有をもちとることが唯一の基準と考える。この全人民武装・全人民所有を内実とするコミューンの団結の獲得過程で出来る限り労働の量による分配比率を高めることを追求すればよいのだ」（蜂起六三号）

我々が二所有制社会に「ゴータ綱領批判」の基準をアテハメていると批判したことを承認し、今度は仏氏は全人民所有制の社会まで労働証書制をあてはめてはならないと思ひ込み、社会主義のもとでの労働証書制を否定してしまった。これは氏が二所有制の区別と同一性をすっかり把握できていないことに根拠がある。全人民所有制の社会を強引に社会主義と思わずにいるところに根拠があること。又怪しげな、主観的な仏式労働者国家論（我々がみれば、社会主義論）を展開しているわけだが、世界革命の根拠地化の問題は強調しているが、からっきし国内建設の実践論はなく、分業への隷属の克服、全面的に発展した人間をつくる問題。分業に対して人間の側が多面的能力を開発し、一生涯一つの職業にしばりつけられないようにする問題、都市を農村に分散化し三分業の矛盾を克服してゆく問題、生産関係と上部構造の変革が不可分一体であるような点で上部構造を変革しつつ生産関係を変革した

りする問題、分配はこのような生産関係と上部構造の変革（生産力の上昇）に規定され、これに応じて、労働の差に応ずる分配から必要に応じた分配制度に変革することに眼目があり、社会主義の問題を分配量の問題に一面化するの修正主義のシエイロックの意識であることなどは何一つ語られていない。

そして、労働の量による分配の共産主義における不平等性を克服し、必要に応じた分配に変革するのではなくて、なんと驚くべきことに、「正に労働の量による分配の比率を高めてゆくこと」に基準がすえられ、「幾ら分とるか」の問題に錢ケバ思想の下に塗りがえられ、「幾ら分とるか」の問題に修正されてゆくのです。共産主義論や社会主義論は、とりもなおさずそれを語るその人自身の生息をもの見事に表現するものではないか。

△3√生産力主義・帝国主義国際分業論の美化、社会主義をプロレタリアが総資本家化するが如くとらえるエセ社会主義観批判。一国社会主義が成立しない、という仏氏の驚くべきブルジョア的論拠を批判する。

仏氏は一国社会主義が成立しない根拠を次のごとくあげる。「革命戦争の準備、一国的資源の条件、生産力の限界の三条件を考えるならば一国社会主義など考えること自体誤まり

である」と（蜂起六二号）。この様な主張は驚くべき仏氏のブルジョア性を物語っています。革命戦争の準備は、何故に社会主義であつたらできないか。我々はプロ独社会よりも、社会主義社会の方がより一層階級的に団結し組織されており、革命戦争の準備は可能であると考える。どうも仏氏の「社会主義」とは、社会主義になれば世界革命の党に命を捧げ出して闘うことがなくなる、といった類の思想が根底にあるようです。仏氏の社会主義観とは、全ての人民がブルジョア化し、ブルジョアの理論を得るから国際的プロレタリア人民の自己犠牲にならなくなる、という卑俗極まる代物である。つまり、これは仏氏がもしもだ、権力奪取し、全人民所有化したならば、世界革命の根拠地化など絶対にしない、という自己暴露ではないのか。

一国的資源の条件を何故に仏氏はあげるのか。ここでも仏氏のブルジョア思想が遺憾なく発揮されている。しかも特殊な、日本的な島国根性と結びついた。それが、仏氏は、日本における社会主義の条件を分析し、日本が原料資源国ではなく、工業資本主義国であることを念頭におき、工業国日本と農業植民地国の食料や資源との、世界革命を通した「社会主義・国際分業」の体制を思ひえがいているようだが、これは根本的に資本主義の利潤率の高い重化学工業を優先させ、軽工業や農業を軽視する分業矛盾を国際的に拡大させる利潤率本位の資本主義国際分業論であり、基本的には帝国主義の

論理となら変わりなく、ソ連の提唱する「社会主義大家族論」「社会主義国際分業論」と全く変わらないものである。

社会主義社会になれば、我々はこのような資本主義の利潤優先の国内・国際分業の論理と対決する。これとは逆の論理たる、工業と農業を比例的に発展させ、軽工業も発展させ、相互が支え合って前進する路線を採用する。又、工業国は工業国の方に偏向しなくて、同時に農業や軽工業を育成する社会にかわり、又、農業国では工業を育成し、一民族・一地域・一ブロックがワンセットの重・軽工業、農業、商業をまんべんなく発展させ、これ等総体が世界社会主義の総合的計画性の中に包摂させられているような単一の世界共同体を想定する。このような利潤率優先の資本制分業拡大を消滅させる社会主義計画経済の論理は、世界革命戦争の只中の全人民所有制の社会の国際関係でも同じであり、ソ連とコモコン国家の關係の如く、ソ連を中心にして農業・中進国は固定化されたままであるような関係は、真平御免です。日本社会主義の工業や貿易の立国性は大きな特徴になるにせよ、これとして帝国主義的分業の論理を廃絶し、又、国内における農業や軽工業を興隆させ、国内資源は国内資源で自力更生で開拓すること。この上で、国際的な無相通ず平等互恵の關係が樹立されることを特徴とするものにならない。仏氏の主張は、権力奪取した後の日本社会でも相変わらず生産力の遅れた諸民族を抑圧し、国内農民・軽工業・プロレタリアを抑

庄する思想であり、自力更生の原則をおさえない点で、資源の条件をもって権力をとったり、社会主義に進むことを恐れる主張であり、ブルジョアの日和見主義思想もいいたるところです。

第三の「生産力の限界」について、確かに生産力の発展は社会主義の発展を規定するし、とりわけ、単一の世界生産力の創出に較べて、一国的に制約された生産力では社会主義の発展は極めてゆるやかでしかない。だが生産力の発展が遅いからといって、生産関係と上部構造の変革が進展すれば、そして資本主義復活との闘争が継続すれば国際帝国主義に対抗でき、生産力も発展できるわけであり、生産力の低さが直接に社会主義の成立を規定するものにはならない。問題の中心は、全人民所有制の下でも二つの道の階級闘争とプロ独を堅持し、生産関係と上部構造を継続的に変革してゆくか、スターリンの如く国家資本主義への道を歩むかにかかっているのであって、生産力の高低が決定的な問題ではないのである。

△4√全人民所有制のもとの階級闘争存続を否定するこ
とによって、ソ連「全人民」国家論に屈服した仏氏。

仏氏は、社会主義は「階級があつてはならない」社会だと規定するわけだが、我々は、このような規定は、全く曖昧で非弁証法的だと考える。階級がもともたないのか、あつても

うな関係にたつていのかを分析する。従つて、過渡期世界における全人民所有制の社会は明らかに社会主義であること。しかし、これは資本主義から生まれたばかりの社会であり、多くの資本主義の母斑をもちこしており、上部構造の変革は未だ端緒についたばかりである。それ故に、資本制生産の土台のもとの階級とは性質は違うが、この社会には、新旧の階級が残存し、プロレタリア階級独裁が必要であると考える。いふなれば、生産手段の全人民所有が名実ともに共有されきておらず、私的所有の性質が、この全人民所有制の社会主義には残存しているのです。ところが、「プロ独下の全人民所有制の完了した段階で、何故階級が残るのだろうか」と仏氏は全人民所有制の下で階級は、残存せず、階級矛盾も階級闘争も存在せず、プロレタリア階級独裁も一対内的には一必要でない、というわけですから、結局この主張は、ソ連修正主義の「全人民の国家」「全人民の党」の盗作であることが明瞭となる。それに、仏氏は、一方では、全人民所有制のもとは無階級化するといっておきながら、(それならば、仏氏の観点に立つても、社会主義であることは明瞭なわけだが、又、過渡期世界での、全人民所有制の社会の現出は、理論的にも実際のにも十分予想されるにもかかわらず)他方では、一国社会主義は考えられない、なんていって、例のブルジョアの論拠をあげるわけだが、これは全くの自家撞着ではないか。

それをなくすのか、といった問題がはつきりせず、たんに願望、否、論理を吐露しているにすぎない。このような氏の姿勢は、レーニンの「国家と革命」の中で示した「新しい社会を考へ出し、夢想するユートピア主義は少しもない」「旧社会から新社会への過渡的形態を自然的過程として研究する」といった姿勢とは全く相異なるものであるといわねばならない。可能的過程と現実的過程との混同!

仏氏は、「社会主義とは、階級をなくすことだ」(レーニン)「この社会主義とは革命の永続を宣言することであり、プロレタリア階級の階級的独裁のことである。この独裁は、階級差異一般の廃絶に、階級差異の基礎である一切の生産関係の廃絶がこれらの生産関係に照応する一切の社会関係の廃絶に、そして、これ等の社会関係から生じるいっさいの観念の変革に到達するための必然的な過渡的段階である」(マルクス「フランスに於ける階級闘争」)を如何に考えるのか。又、仏氏は、階級概念について如何に考えているのか。我々は、階級概念をレーニンの「偉大なる創意」に立脚して生産関係・社会関係・分配関係の三つの要素から把握する。それ故に、所有面で階級を形成する経済的基礎が一応除去されたとしても階級は自動的にはなくならず、これをなくすには、上部構造の継続革命が必要であると考える。

我々は、社会の基本的性格を規定する第一の基準を生産関係におき、その上でその社会が生産関係と上部構造がどのよ

△5√コスモポリタニズム思想と、帝国主義国際分業論を基礎とする仏エセ世界プロ独論を批判す―世界プロレタリア独裁の基本問題とは何か。

「日向派の世界・一国同時革命に酷似しており、又世界プロ独という用語が前後の関連で、了解不能な形で使われているが、一国プロ独と一国社会主義が世界プロレタリア独裁として併存しているわけだから、実態は連邦制なのです」(蜂起六二号)七〇年末―七一年当時、連合ブンドと日向派との間に、世界プロ独の問題をめぐって論争があつたことは確かですが、この論争は大風呂敷を広げたわりには無内容で、全編これ空論で「日向派は連邦制であり、我々は統一共和制である」といったことがいわれただけであり、その世界プロ独の内容規定ははつきりされないまま、放りばなしにされてきた代物であった。我々の知る限り、連合派の統一共和制も、又日向派の「連邦制」(?)なるものも、具体的な理論的規定をした文章を見わけないわけですが、我が仏氏はワケもわからずムード的に便乗し、我々に「連邦制」なるデマを又また流してことが解決したかの如く振舞おうとしている。それ故に、我々の世界プロレタリア独裁の基本規定を展開するなかで、仏氏が如何にこの問題に無知無理解で、彼の基本的特質はコスモポリタニズムと資本主義国際分業論の焼き直したるソ連式「社会主義」国際分業論のアマルガムでしかないこと

を、つまり、ブルジョア思想でしかないことを暴露してゆくことにする。尚世界プロレタリア独裁に関しては、第二次ブンド以来主張されてきたマルクス主義の基本概念であり、今や中核派ですら使用しはじめた程度の市民権を得てきた概念でありつつも、その概念規定に関しては、ほとんど、なんら明確にされてないのであり、この意味で仏批判をやりつつ、世界プロレタリア独裁の基本問題を分析することは、極めて有意義なことと考える。

世界プロレタリア独裁社会は、国際帝国主義と社会帝国主義が打倒され、武装解除された後の社会である。それ故に、この段階で、各国、地域、ブロック毎に、その実態は分断されて存在していた世界プロレタリアートとその世界党―世界赤軍―世界革命戦争統一戦線の陣型は内容だけのみならず形式的にも、世界党―世界赤軍―世界プロレタリア独裁政府として形成される。世界プロレタリアートは、世界党―世界赤軍―世界プロレタリア独裁政府を通して、生産手段の社会主義的世界単一の共有化を開始する。世界プロレタリア独裁政府は生産手段の管理を開始し、世界社会主義をめざした計画経済のもとに生産手段と労働を配分する。この過程はその最大の内実に於て、第一には、各国毎の生産手段の共有化の過程であり、国内三大分業の克服の深化の過程でもある。この過程については、これまで述べてきたので省略する。と同時に、第二は、資本主義がつくり出した、国際的な資本制生産

交換の原則を徐々に確立してゆくこと。第四は以下のことである。結局世界プロレタリア独裁は、経済的には国際的・国内的な各国経済を、資本主義の商品交換と国際・国内分業の自然発生的な論理に打打ち、世界社会主義に向けての世界的・各国的計画経済が勝利してゆく過程として存在しなければならぬ。この要に於ける世界の都市工業と農村・農業の分業は世界的規模での全人民所有制と集団所有制の併存によって、すなわち、工業が発達しており、プロレタリアによって経済的に可能な全人民所有制と工業が未発達でプロレタリアがいず、農業と農民が主要構成である農業植民地国では全人民所有は一挙には不可能なので、経済的に可能な集団所有制との併存によって徐々に解決されてゆくであろう。第五は、階級闘争―継続革命に関する問題である。このような経済過程は国際的・国内的に残存する資本主義勢力を一掃するため最後の階級闘争が遂行されていく過程である。国際的には資本主義国際分業論やそれに立脚する資本主義・工業国の「先進国主義」としてのブルジョア民族主義と農業植民地国の「後進国主義（植民地奴隷根性―売国根性）」を不問にし、実質的にはむしろこれを促進するソ連式社会主義国際分業論などのコスモポリタニズム（世界主義、単純国境取り払い論）に固執するブルジョア勢力との闘争との闘争過程である。ここでも二つの道の闘争が峻然と存在すること。第六に、ブルジョア民族国家は、対内的階級対立と、対外的なブルジョア

主義がつくり出した、国際的な資本制生産の分業構造を打破・改造し、社会主義の国際経済関係を樹立し、革命の各国各ブロック毎の不均等発展から生じる不均衡性―不均等発展そのものが問題ではなく、その不均等性を計画的に統御しえないことから生じる不均衡性こそが問題なのだ―を是正してゆく過程の最大の問題は、資本主義工業国と農業植民地国の国際分業矛盾の克服の問題であり、この克服は、基本的にはこれまで中国社会主義革命でみた如く、農業基礎・工業主導の原則にたち、世界の農業・農村に世界の都市・工業を接近させ、結合させ、工業国に農業を育成し、これを実現させる最大の環としての教育の革命的変革とその水準の向上・普及をはかることにある。このことによって、各国の自力更生の経済体系を工業・農業に於けるワンセットの生産―分配体系として確立してゆくことにある。この原則のうえに立って、各国毎の特殊性個別性に依じて、ないものを相互に補いあい「有無相通する」国際的分配体制を確くことです。要は、利潤率本位に労働者・人民の社会的福祉を無視して、工業と農業の格差を埋めず、増々これを拡大してゆく、ソ連式の国際分業論、実は帝国主義の資本制分業の論理を徹底して粉砕し、これに農業基礎・工業主導の自力更生の社会主義の経済原則を対置してゆくことです。第三に、又各国毎の生産力の不均等性に依じて、単位労働時間の分配量が各「国」毎に相異なる事態を是正し、世界社会主義に向けて世界単一の等量労働

民族国家相互の支配と被支配、抑圧と被抑圧、等の民族矛盾を根拠にして生成している。それ故に、国内的に階級対立・階級矛盾、階級闘争が、他方での国際的な資本主義の分業関係が、徐々に消滅し、国際的・国内的な分業矛盾が、世界社会主義の段階でほとんど階級性を帯びなくなってゆく以上、この世界プロレタリアート独裁の国家は、世界的レベルでも一国的レベルでも半国家であり、世界社会主義から死滅を開始し始める国家である。世界社会主義のレベルでは、階級や階級闘争も消滅を開始し、世界資本主義分業に基礎をおく資本主義的民族矛盾も消滅を開始するが故に国家は世界的にも一国的にも死滅を開始し始め、階級支配にかわって、単にモノの管理をめざす機構だけが残され発展してゆくのです。かかる世界プロレタリア独裁の世界的・各国的「国家」の問題はいかえるならば、対内的階級矛盾（分業矛盾も含めて）と対外的・国際的な民族矛盾（資本主義国際分業に基礎をおく）がある限り、正確には、この矛盾を世界プロレタリア人民が目的意識的にまだ統御しきれない限り、幾ら主観的に民族国家を消滅させようとしても、各国毎の民族国家は死滅せず、生産手段の単一化、計画経済の単一化やこれに基礎をおく、世界プロレタリアの単一性は相対的単一化とならざるを得ない。各民族毎の自力更生の社会主義建設を無視出来ず、否、それを促進するものとしての世界プロレタリアート独裁政府の任務がある以上、世界プロレタリア政府は、広範囲な自治制・分権制を包含するもの

であることは明瞭です。つまり、中央集権制だが相対的単一化の中央集権制であり、各民族の分権・自治制が内包されていること。従って世界プロ独社会の行政は、中央集権制と合衆制の複合構造であるといってもよい。単一化、或いは中央集権化の概念は、生産手段を強引に中央集権化し、観念的・主観的な計画経済を、世界プロレタリア独裁社会の基本単位たる民族共同体の自力更生的な社会主義化を無視して、民族障壁を除去して各民族単位に押しつけることではないこと。世界プロレタリアート独裁政府は、民族共同体の自力更生路線を前提にしつつ徹底して中央集権化を強める。大体、以上六点位を世界プロレタリアート独裁の基本規定としてあげておくことにします。

仏氏の主張は、以上の世界プロ独の基本問題をふまえた場合、その階級的性格は明瞭です。仏氏の主張は、一見「単一化」「中央集権制」を主張しているので左翼的に見えるが、この内容を分析するならば、④プロレタリアートを指導階級とする―又全人民がプロレタリア化する―民族共同体を単位として、その共同体のワンセットの自力更生の社会主義の経済体系をつくる方向で、これを一つの経済単位として、世界プロレタリア独裁を捉えようとしていず、単純に民族障壁Ⅱ国境を取り払うことよって、ブルジョア民族国家の矛盾が解決されるように考える反動的な考え方であること。この考え方は、ブルジョア民族国家の矛盾の経済的・社会的解決を

考えない、国境取り払いの単純な世界主義、つまり、コスモポリタニズムの、世界放浪のヒッピー達の描く未来社会図たるブルジョア思想である。反動化すれば、これは、帝国主義の侵略思想につながってゆくものです。⑤仏氏は、世界社会主義に向けての資本主義国際分業を打破し、自力更生を単位とする、世界的規模に於ける農業基礎・工業主導とする二所有利の方向での具体的な戦略を何一つ明確にせず、ソ連式社会主義国際分業論、実は帝国主義国際分業論に落ち込んでいくこと。⑥仏氏は、世界プロ独社会の単一化・中央集権制の問題を、コスモポリタニズムと帝国主義国際分業論で規定しようとしているが故に、基本性格が実はブルジョア民族国家の揚棄に内実があることがわからず、それ故に、単一化が完成することは、実は民族国家（プロ独の半国家だが）が消滅することであることを意味すること、従って、民族国家の揚棄は、世界社会主義の段階でしか可能でない以上、それ以前の世界プロ独社会では、民族分権Ⅱ自治制を内含する、相対的単一化である関係がわからないこと、等からして、形は左のように見えるが、内実は、極右のブルジョア路線であることは明瞭です。

〔完〕

共産主義者同盟赤軍派(プロ革)

1975年7月20発行

定価480円